LuaIAT_EX-ja 用 jsclasses 互換クラス

LuaT_EX-ja プロジェクト

2016/03/21

\blacksquare	\ <i>\</i> 77
\blacksquare	/ 八

1 1.1	はじめに jsclasses.dtx からの主な変更点	2
2	LuaT _E X-ja の読み込み	3
3	オプション	3
4	和文フォントの変更	10
5	フォントサイズ	13
6 6.1	レイアウト ページレイアウト	18 19
7	ページスタイル	25
8	文書のマークアップ	28
8.1	表題	28
8.2	章・節	33
8.3	リスト環境	43
8.4	パラメータの設定	50
8.5	フロート	51
8.6	キャプション	52
9	フォントコマンド	54
10	相互参照	54
10.1	目次の類	54
10.2	参考文献	60
10.3	索引	61
10.4	脚注	62

、禁止

64

12 いろいろなロゴ 66

13 初期設定 69

1 はじめに

これは奥村晴彦先生による jsclasses.dtx を LuaIATEX-ja 用に改変したものです。次のドキュメントクラス(スタイルファイル)を生成します。

〈article〉 ltjsarticle.cls 論文・レポート用

⟨book⟩ ltjsbook.cls 書籍用

〈jspf〉 ltjspf.cls 某学会誌用

〈kiyou〉 ltjskiyou.cls 某紀要用

ltjclasses と違うのは以下の点です。

1.1 jsclasses.dtx からの主な変更点

全ての変更点を知りたい場合は、jsclasses.dtx と ltjsclasses.dtx で diff をとって下さい。zw, zh は全て \zw, \zh に置き換えられています。

- フォントメトリック関係のオプション winjis は単に無視されます。
- 標準では jfm-ujis.lua (LuaT_EX-ja 標準のメトリック, OTF パッケージのものが ベース) を使用します。
- uplatex オプションを削除してあります。
- disablejfam オプションが無効になっています。もし
 - ! LaTeX Error: Too many math alphabets used in version ****. のエラーが起こった場合は、lualatex-math パッケージを読み込んでみて下さい。
- papersize オプションの指定に関わらず PDF のページサイズは適切に設定されます。
- LuaT_EX-ja 同梱のメトリックを用いる限りは、段落の頭にグルーは挿入されません。 そのため、オリジナルの jsclasses.dtx 内にあった hack (\everyparhook) は不要 になったので、削除しました。
- 「amsmath との衝突の回避」のコードは、上流で既に対処されているうえ、これがあると grfext.sty を読み込んだ際にエラーを引き起こすので削除しました。

[2014-02-07 LTJ] jsclasses 2014-02-07 ベースにしました。

[2014-07-26 LTJ] 縦組用和文フォントの設定を加えました。

[2014-12-24 LTJ] **\@setfontsize** 中の和欧文間空白の設定で if 文が抜けていたのを直しました。

[2016-01-30 LTJ] \rmfamily 他で和文フォントファミリも変更するコードを LuaTeX-ja

カーネル内に移しました。

[2016-03-21 LTJ] LuaT_EX beta-0.87.0 では PDF 出力時に\mag が使用できなくなったので、ZR さんの bxjscls を参考に使わないように書き換えました。

以下では実際のコードに即して説明します。

2 LuaTFX-ja の読み込み

まず、luatexja を読み込みます。

1 \RequirePackage{luatexja}

3 オプション

これらのクラスは \documentclass{ltjsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{ltjsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

2 \newif\if@restonecol

\if@titlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

 $3 \neq 3$

\ifCopenright \chapter, \part を奇数ページ起こしにするかどうかです。書籍では真が標準です。

 ${\tt 4 \%} \verb|\hook>\newif if @open right|$

\if@mainmatter 真なら本文, 偽なら前付け・後付けです。 偽なら \chapter で章番号が出ません。

5 % <book > \newif \if @mainmatter \@mainmattertrue

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチですが、実際には用いられません。

6 \newif\if@enablejfam \@enablejfamtrue

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積 $1 \, \mathrm{m}^2$,縦横比 $1:\sqrt{2}$ の長方形の辺の長さを mm 単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては mm 単位に切り捨てたものが A1,A2,…です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が $1.5\,\mathrm{m}^2$ ですが,ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$ です。このため,IATEX 2_{ε} の b5paper は $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$ ですが,pIATEX 2_{ε} の b5paper は $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$ になっています。ここでは pIATEX 2_{ε} にならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形, 182mm×230mm), a4var (A4 変形, 210mm×283mm) を追加しました。

```
7 \DeclareOption{a3paper}{%
    \setlength\paperheight {420mm}%
    \setlength\paperwidth {297mm}}
10 \DeclareOption{a4paper}{%
    \setlength\paperheight {297mm}%
11
    \setlength\paperwidth {210mm}}
12
13 \DeclareOption{a5paper}{%
    \setlength\paperheight {210mm}%
14
15
    \setlength\paperwidth {148mm}}
16 \DeclareOption{a6paper}{%
    \setlength\paperheight {148mm}%
17
    \setlength\paperwidth {105mm}}
19 \DeclareOption{b4paper}{%
    \setlength\paperheight {364mm}%
20
    \setlength\paperwidth {257mm}}
22 \DeclareOption{b5paper}{%
    \setlength\paperheight {257mm}%
    \setlength\paperwidth {182mm}}
24
25 \DeclareOption{b6paper}{%
26
    \setlength\paperheight {182mm}%
    \setlength\paperwidth {128mm}}
27
28 \DeclareOption{a4j}{%
    \setlength\paperheight {297mm}%
29
    \setlength\paperwidth {210mm}}
30
31 \DeclareOption{a5j}{%
    \setlength\paperheight {210mm}%
32
    \setlength\paperwidth {148mm}}
33
34 \DeclareOption{b4j}{%
    \setlength\paperheight {364mm}%
35
    \setlength\paperwidth {257mm}}
37 \DeclareOption{b5j}{%
    \setlength\paperheight {257mm}%
38
39
    \setlength\paperwidth {182mm}}
40 \DeclareOption{a4var}{%
    \setlength\paperheight {283mm}%
    \setlength\paperwidth {210mm}}
42
43 \DeclareOption{b5var}{%
    \setlength\paperheight {230mm}%
44
    \setlength\paperwidth {182mm}}
46 \DeclareOption{letterpaper}{%
    \setlength\paperheight {11in}%
47
    \setlength\paperwidth {8.5in}}
48
49 \DeclareOption{legalpaper}{%
    \setlength\paperheight {14in}%
    \setlength\paperwidth {8.5in}}
52 \DeclareOption{executivepaper}{%
```

- 53 \setlength\paperheight {10.5in}%
- 54 \setlength\paperwidth {7.25in}}
- ■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。
- 55 \newif\if@landscape
- 56 \@landscapefalse
- 57 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}
- ■slide オプション slide を新設しました。
- 58 \newif\if@slide
- 59 \@slidefalse
- ■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的なドキュメントクラスと同様にポイント数から10を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。 [2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

- 60 \newdimen\ltjs@mpt \ltjs@mpt=1\p@
- 61 \DeclareOption{slide}{\@slidetrue\ltjs@mpt=3.58318\p@\@landscapetrue\@titlepagetrue}
- 62 \DeclareOption{8pt} {\ltjs@mpt=.83333\p@}% 1.2^(-1)
- 63 \DeclareOption{9pt} {\ltjs@mpt=.91287\p@}% 1.2^(-0.5}
- $64 \ensuremath{\mbox{\mbox{$10pt}{\langle \mbox{$1p0$}}}} \ensuremath{\mbox{$1p0$}} \ensuremath{\mbo$
- 65 \DeclareOption{11pt}{\ltjs@mpt=1.0954\p@}% 1.2^0.5
- $66 \ensuremath{\mbox{\sc Mpt=1.2\p0}} \label{lem:mpt=1.2\p0}$
- $67 \ensuremath{\label{locality}} \{\label{locality} $$ 1.44\p@}$
- $68 \ensuremath{\mbox{\sc MpclareOption}\{17pt\}{\ltjs@mpt=1.728\ensuremath{\mbox{\sc MpclareOption}}\}}$
- 69 \DeclareOption{20pt}{\ltjs@mpt=2\p@}
- 70 \DeclareOption{21pt}{\ltjs@mpt=2.0736\p@}
- 71 $\DeclareOption{25pt}{\tjs@mpt=2.48832\\p@}$
- 72 \DeclareOption{30pt}{\ltjs@mpt=2.98598\p@}
- 73 \DeclareOption{36pt}{\ltjs@mpt=3.58318\p@}
- 74 \DeclareOption{43pt}{\ltjs@mpt=4.29982\p@}
- 75 \DeclareOption{12Q} {\ltjs@mpt=.92308\p@}% 1pt*12Q/13Q
- 76 \DeclareOption{14Q} {\ltjs@mpt=1.07692\p@}% 1pt*14Q/13Q
- 77 \DeclareOption{10ptj}{\ltjs@mpt=1.08547\p@}% 1pt*10bp/13Q
- 78 \DeclareOption $\{10.5ptj\}\{\tjs@mpt=1.13974\p0\}$
- 79 \DeclareOption{11ptj}{\ltjs@mpt=1.19402\p@}
- 80 \DeclareOption{12ptj}{\ltjs@mpt=1.30256\p@}
- ■トンボオプション トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は lltjcore.sty で行います。オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ \hour, \minute は luatexja-compat.sty で宣言されています。
- 81 \hour\time \divide\hour by 60\relax
- 82 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax

- 83 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
- 84 \DeclareOption{tombow}{%
- 85 \tombowtrue \tombowdatetrue
- 86 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
- 87 \@bannertoken{%
- 88 \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
- 89 \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
- 90 \maketombowbox}
- 91 \DeclareOption{tombo}{%
- 92 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 93 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
- 94 \maketombowbox}
- ■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これ もアスキー版のままです。
- 95 \DeclareOption{mentuke}{%
- 96 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 97 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
- 98 \maketombowbox}
- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- 99 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse}
- 100 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue \@mparswitchtrue}
- $101 \ensuremath{\mbox{\colored}}{\mbox{\colored}{\mbox{\colored}}{\mbox{\colored}}}}}}}}}}}}}}}} \ended$
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- 102 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
- 103 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
- ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 104 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
- 105 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
- ■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、openany で偶数ページ からでも始まるようになります。
- $106 \label{localized} $$106 \label{localized} $$106$
- 107 %<book>\DeclareOption{openany}{\@openrightfalse}
- ■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。
- eqnarray IATEX の eqnarray 環境では & でできるアキが大きすぎるようですので,少し小さくしま す。また,中央の要素も \displaystyle にします。
 - 108 \def\eqnarray{%
 - 109 \stepcounter{equation}%
 - 110 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%

```
111
             \global\@eqnswtrue
112
             \m@th
113
             \global\@eqcnt\z@
              \tabskip\@centering
114
             \let\\\@eqncr
115
             $$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
116
                      \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
117
118
                    &\global\@eqcnt\@ne \hfil\displaystyle{{}##{}}\hfil
                    &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
119
                    &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
120
                           \tabskip\z@skip
121
122
                    \cr
      leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出
 力されます。森本さんにしたがって訂正しました。
123 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
124 \ensuremath{\texttt{NeclareOption\{fleqn}_{\ensuremath{\texttt{Input\{fleqn.clo}\}}\%}
125 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
           \def\eqnarray{%
126
                \stepcounter{equation}%
127
                \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
128
                \global\@eqnswtrue\m@th
129
                \global\@eqcnt\z@
130
131
                \tabskip\mathindent
                \left| \cdot \right| = \ensuremath{\mbox{Qeqncr}}
132
133
                \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
                \ifvmode
134
135
                    \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
136
                \verb|\addtolength| above displayskip{\parskip}||% | addtolength | above displayskip{\parskip}||% | abov
137
                \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
138
                \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
139
                \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
140
                $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
141
                \bgroup
142
                    \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
143
144
                    &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
                    &\global\@eqcnt\tw@
145
                         $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
146
                    &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
147
                \tabskip\z@skip\cr
148
149
                }}
 ■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。
  これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。
```

- 150 % \DeclareOption{openbib}{%
- 151 % \AtEndOfPackage{%
- 152 % \renewcommand\@openbib@code{%

```
153 % \advance\leftmargin\bibindent
```

- 154 % \itemindent -\bibindent
- 155 % \listparindent \itemindent
- 156 % \parsep \z0}%
- 157 % \renewcommand\newblock{\par}}}
- ■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション pTEX では数式中では 16 通りのフォントしか使えませんでしたが、LuaTEX では Omega 拡張が取り込まれていて 256 通りのフォントが使えます。ただし、IATEX 2ε カーネルでは未だに数式ファミリの数は 16 個に制限されているので、実際に使用可能な数式ファミリの数を増やすためには lualatex-math パッケージを読み込む必要があることに注意が必要です。
- 158 \DeclareOption{disablejfam}{%
- 159 \ClassWarningNoLine{\@currname}{The class option 'disablejfam' is obsolete}}
- ■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。
- 160 \newif\ifdraft
- $161 \end{draft} {\tt \drafttrue \setlength\overfullrule\{5pt\}}$
- 162 \DeclareOption{final}{\draftfalse \setlength\overfullrule{Opt}}
- ■和文フォントメトリックの選択 ここでは OTF パッケージのメトリックを元とした,jfm-ujis.lua メトリックを標準で使います。古い min10,goth10 互換のメトリックを使いたいときは mingoth というオプションを指定します。pTEX でよく利用される jis フォントメトリックと互換のメトリックを使いたい場合は,ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションを指定します。ptexjis というオプションは無視されます。
- 163 \newif\ifmingoth
- $164 \mbox{ mingothfalse}$
- 165 \newif\ifjisfont
- 166 \jisfontfalse
- 167 \newif\ifptexjis
- 168 \ptexjisfalse
- 169 \DeclareOption{winjis}{%
- $170 \quad \texttt{\ClassWarningNoLine} \{\texttt{\Ccurrname}\} \{\texttt{The class option 'winjis' is obsolete}\} \}$
- 171 \DeclareOption{uplatex}{%
- 172 \ClassWarningNoLine{\@currname}{The class option 'uplatex' is obsolete}}
- 173 \DeclareOption{mingoth}{\mingothtrue}
- 174 \DeclareOption{ptexjis}{\ptexjistrue}
- 175 \DeclareOption{jis}{\jisfonttrue}
- ■papersize スペシャルの利用 ltjsclasses では papersize オプションの有無に関わらず, PDF のページサイズは適切に設定されます。
- $176 \neq 176$
- $177 \papersizefalse$
- ■英語化 オプション english を新設しました。

- 179 \newif\if@english
- 180 \@englishfalse
- 181 \DeclareOption{english}{\@englishtrue}

\RequirePackage するのはやめました。

- ■Itjsreport 相当 オプション report を新設しました。
- 182 %<*book>
- 183 \newif\if@report
- 184 \@reportfalse
- $185 \end{Temport} {\tt Qopenrightfalse\end{Temport} } $$186 \% \end{Temport} $$186 \% \end$
- ■オプションの実行 デフォルトのオプションを実行します。multicols や url を
- 187 %<article>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,notitlepage,final}
- 188 %<book>\ExecuteOptions{a4paper,twoside,onecolumn,titlepage,openright,final}
- 189 %<jspf>\ExecuteOptions{a4paper,twoside,twocolumn,notitlepage,fleqn,final}
- 190 %<kiyou>\ExecuteOptions{a4paper,twoside,twocolumn,notitlepage,final}
- 191 \ProcessOptions

後処理

- 192 \if@slide
- 193 \def\maybeblue{\@ifundefined{ver@color.sty}{}{\color{blue}}}
- 194\fi
- $195 \setminus if@landscape$
- 196 \setlength\@tempdima {\paperheight}
- 197 \setlength\paperheight{\paperwidth}
- 198 \setlength\paperwidth {\@tempdima}
- 199 \fi

■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

- 200 %<article|book>\if@slide\def\n@baseline{13}\else\def\n@baseline{16}\fi
- 201 %<jspf>\def\n@baseline{14.554375}
- $202 \% \text{kiyou} \def \n@baseline{14.897}$
- ■拡大率の設定 サイズの変更は TEX のプリミティブ \mag を使って行います。9 ポイント については行送りも若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていたところを \inv@mag in に直しましたので,geometry パッケージと共存できると思います。なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

[2016-03-21] \mag を使わないように全面的に書き換えました。\ltjs@mpt に「拡大率だけ大きくした pt」の値が格納されます。bxjscls と同様に、\@ptsize は 10pt, 11pt, 12pt

オプションが指定された時だけ従来通り0, 1, 2と設定し、それ以外の場合は-20とするこ とにしました。\inv@mag はもはや定義していません。

```
203 \ifdim\ltjs@mpt<.92\p@ % 8pt, 9pt 指定時
```

 $204 \ \def\n@baseline{15}%$

205 \fi

206 \newcommand{\@ptsize}{0}

207 \ifdim\ltjs@mpt=1.0954\p@ \renewcommand{\@ptsize}{1}\else

208 \ifdim\ltjs@mpt=1.2\p@ \renewcommand{\@ptsize}{2}\else

209 \renewcommand{\@ptsize}{-20}\fi\fi

210 %<*kiyou>

211 $\t 0.9769230 p0$

212 %</kiyou>

■PDF の用紙サイズの設定

\pdfpageheight

 \protect \pdfpagewidth 出力の PDF の用紙サイズをここで設定しておきます。protecttombow が真のときは protect2 インチ足し ておきます。

> [2015-10-18 LTJ] LuaT_FX 0.81.0 ではプリミティブの名称変更がされたので,それに合 わせておきます。

213 $\left(\frac{0}{ma}\right)$

214 \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}

215 \iftombow

216 \advance \@tempdima 2in

217\advance \@tempdimb 2in

218 \fi

219 \ifdefined\pdfpagewidth

\setlength{\pdfpagewidth}{\@tempdima}

\setlength{\pdfpageheight}{\@tempdimb} 221

222 \else

\setlength{\pagewidth}{\@tempdima}

\setlength{\pageheight}{\@tempdimb}

225 \fi

和文フォントの変更

JIS の 1 ポイントは 0.3514mm (約 1/72.28 インチ), PostScript の 1 ポイントは 1/72インチですが、 $T_{\rm F}X$ では 1/72.27 インチを 1pt (ポイント), 1/72 インチを 1bp (ビッグポ イント)と表します。QuarkXPress などの DTP ソフトは標準で 1/72 インチを 1 ポイン トとしますが、以下ではすべて 1/72.27 インチを 1pt としています。1 インチは定義により 25.4mm です。

pTEX(アスキーが日本語化したTEX)では、例えば従来のフォントメトリック min10 や JIS フォントメトリックでは「公称 10 ポイントの和文フォントは、実際には 9.62216pt で出力される (メトリック側で 0.962216 倍される)」という仕様になっています。一方, LuaTeX-ja の提供するメトリックでは、そのようなことはありません。公称 10 ポイントの 和文フォントは、10ポイントで出力されます。

この ltjsclasses でも, 派生元の jsclasses と同じように, この公称 10 ポイントのフォントをここでは 13 級に縮小して使うことにします。そのためには, $13\,\mathrm{Q}/10\,\mathrm{pt}\simeq0.924715$ 倍すればいいことになります。

\ltj@stdmcfont, \ltj@stdgtfont による、デフォルトで使われ明朝・ゴシックのフォントの設定に対応しました。この 2 つの命令の値はユーザが日々の利用でその都度指定するものではなく、何らかの理由で非埋め込みフォントが正しく利用できない場合にのみluatexja.cfg によってセットされるものです。

[2014-07-26 LTJ] なお, 現状のところ, 縦組用 JFM は jfm-ujisv.lua しか準備していません。

[2016-03-21 LTJ] 拡大率の計算で 1 pt を 1/72.27 インチでなく 0.3514 mm と間違えて扱っていたのを修正.

```
226 %<*!jspf>
```

227 \expandafter\let\csname JY3/mc/m/n/10\endcsname\relax

228 \ifmingoth

- 229 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{n}{<-> s * [0.924715] \ltj@stdmcfont:jfm=min}{}
- 230 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{m}{n}{<-> s * [0.924715] \ltj@stdgtfont:jfm=min}{}

231 \else

- 232 \ifptexjis
- \lambda \DeclareFontShape{JY3}{gt}{m}{n}{<-> s * [0.924715] \ltj@stdgtfont:jfm=jis}{} \lambda \left[\frac{1}{234} \right] \left[\frac{1}{245} \right] \left[\
- 235 \else
- $\label{local-prop} $$ \end{are FontShape JY3} $$ \left(s * [0.924715] \right] $$ \left(s * [0.924715] \right) $$$
- 238 \fi
- 239 **\fi**
- 240 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{n}{<-> s * [0.924715] \ltj@stdmcfont:jfm=ujisv}{}
- 241 \DeclareFontShape{JT3}{gt}{m}{n}{<-> s * [0.924715] \ltj@stdgtfont:jfm=ujisv}{} 242 %</!jspf>

これにより、公称 10 ポイントの和文フォントを 0.924715 倍したことにより、約 9.25 ポイント、DTP で使う単位(1/72 インチ)では 9.21 ポイントということになり、公称 10 ポイントといっても実は 9 ポイント強になります。

某学会誌では、和文フォントを PostScript の 9 ポイントにするために、 $0.9*72.27/72 \simeq 0.903375$ 倍します。

- 243 %<*jspf>
- 244 \expandafter\let\csname JY3/mc/m/n/10\endcsname\relax
- 245 \ifmingoth
- 247 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{m}{n}{<-> s * [0.903375] \ltj@stdgtfont:jfm=min}{} 248 \else
- 249 \ifptexjis
- 250 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{m}{n}{<-> s * [0.903375] \ltj@stdmcfont:jfm=jis}{}
- 252 \else

255 \fi

256 \fi

257 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{n}{<-> s * [0.903375] \ltj@stdmcfont:jfm=ujisv}{} 258 \DeclareFontShape{JT3}{gt}{m}{n}{<-> s * [0.903375] \ltj@stdgtfont:jfm=ujisv}{} 259 %</jspf>

和文でイタリック体、斜体、サンセリフ体、タイプライタ体の代わりにゴシック体を使うことにします。

[2014-03-25 LTJ] タイプライタ体に合わせるファミリを \jttdefault とし,通常のゴシック体と別にできるようにしました。\jttdefault は,標準で\gtdefault と定義しています。

[2003-03-16] イタリック体、斜体について、和文でゴシックを当てていましたが、数学の定理環境などで多量のイタリック体を使うことがあり、ゴシックにすると黒々となってしまうという弊害がありました。 amsthm を使わない場合は定理の本文が明朝になるように \newtheorem 環境を手直ししてしのいでいましたが、 T_EX が数学で多用されることを考えると、イタリック体に明朝体を当てたほうがいいように思えてきましたので、イタリック体・斜体に対応する和文を明朝体に変えることにしました。

[2004-11-03] \rmfamily も和文対応にしました。

[2016-01-30 LTJ] \rmfamily, \sffamily, \ttfamily の再定義を LuaTEX-ja カーネル に移動させたので、ここでは和文対応にするフラグ \@ltj@match@family を有効にさせる だけでよいです。

```
260 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}} \{mc}_{n}_{<->ssub*gt/m/n}_{n}_{\ensuremath{\mbox{$\sim$}}}
261 \ensuremath{\texttt{DeclareFontShape\{JY3\}\{gt\}\{bx\}\{n\}\{<->ssub*gt/m/n\}\{\}}
262 \ensuremath{\mbox{\sc M}} \{it\} \{<-> ssub*mc/m/n\} \{\}
263 \ensuremath{\mbox{\sc M}} \{mc} \{m\} \{sl\} \{<-> ssub*mc/m/n\} \{\} 
264 \ensuremath{\texttt{NordareFontShape{JY3}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{}} \\
265 \ensuremath{\mbox{\sc NpeclareFontShape{JY3}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{{}}}}
266 \ensuremath{\texttt{DeclareFontShape\{JY3\}\{gt\}\{m\}\{sl\}\{<->ssub*gt/m/n\}\{\}}
267 \ensuremath{\mbox{\sc lareFontShape{JY3}{mc}{bx}{it}}{<->ssub*gt/m/n}{}}
268 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{
269 % \DeclareFontShape{JT3}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
270 % \DeclareFontShape{JT3}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
271 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}
272 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{s1}{<->ssub*mc/m/n}{}
273 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{}
274 %% \DeclareFontShape{JT3}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
275 %% \DeclareFontShape{JT3}{gt}{m}{s1}{<->ssub*gt/m/n}{}
276 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
```

277 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{bx}{s1}{<->ssub*gt/m/n}{} 278 \renewcommand\jttdefault{\gtdefault}\01tj@match0familytrue}

 ${
m LuaTeX}$ -ja では和文組版に伴うグルーはノードベースで挿入するようになり、また欧文・和文間のグルーとイタリック補正は干渉しないようになりました。まだ「和文の斜体」については ${
m LuaIATeX}$ カーネル側でまともな対応がされていませんが、 ${
m jsclasses.dtx}$ で行われていた ${
m textmc}$, ${
m textgt}$ の再定義は不要のように思われます。

jsclasses.dtx 中で行われていた \reDeclareMathAlphabet の再定義は削除。

279 \AtBeginDocument{%

- 280 \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}

\textsterling これは \pounds 命令で実際に呼び出される文字です。従来からの OT1 エンコーディング では \\$ のイタリック体が \pounds なので cmti が使われていましたが、1994 年春からは cmu (upright italic, 直立イタリック体) に変わりました。しかし cmu はその性格からして 実験的なものであり、\pounds 以外で使われるとは思えないので、ここでは cmti に戻して しまいます。

[2003-08-20] Computer Modern フォントを使う機会も減り、T1 エンコーディングが一般的になってきました。この定義はもうあまり意味がないので消します。

282 % \DeclareTextCommand{\textsterling}{OT1}{{\itshape\char`\\$}}

アスキーの kinsoku.dtx では「'」「"」「"」前後のペナルティが 5000 になっていたので,jsclasses.dtx ではそれを 10000 に補正していました。しかし,LuaTEX-ja では最初からこれらのパラメータは 10000 なので,もはや補正する必要はありません。

「TFX!」「〒515」の記号と数字の間に四分アキが入らないようにします。

283 \ltjsetparameter{jaxspmode={`!,2}}

284 \ltjsetparameter{jaxspmode={ $\ \overline{\top},1$ }}

「C や C++ では……」と書くと、C++ の直後に四分アキが入らないのでバランスが悪くなります。四分アキが入るようにしました。% の両側も同じです。

285 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}

286 $\left[\frac{286}{3}\right]$

jsclasses.dtx では $80 \parallel$ ff の文字の \xspcode を全て 3 にしていましたが、LuaT_EX-ja では同様の内容が最初から設定されていますので、対応する部分は削除。

\@ 欧文といえば、 I^AT_{EX} の \def\@{\spacefactor\@m} という定義(\@m は 1000)では I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次 のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

 $287 \ensuremath{\tt def\@{\spacefactor3000\space}}$

5 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など)の実際の挙動の設定は、三つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って、たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い, 行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では10と同義のIATFXの内部命令 \@xpt を使っています。この \@xpt の類は次のものがあり, IATFX 本体で定義されてい ます。

\@vpt	5	\@vipt	6	\@viipt	7
\@viiipt	8	\@ixpt	9	\@xpt	10
\@xipt	10.95	\@xiipt	12	\@xivpt	14.4

\@setfontsize ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して, 段落の字下げ \parindent, 和文文字間 のスペース kanjiskip, 和文・欧文間のスペース xkanjiskip を変更しています。

> kanjiskip は ltj-latex.sty で Opt plus 0.4pt minus 0.4pt に設定していますが, これはそもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに、プラスになったり マイナスになったりするのは、追い出しと追い込みの混在が生じ、統一性を欠きます。なる べく追い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが、ごくわずかなマイナスは 許すことにしました。

> xkanjiskip については、四分つまり全角の1/4を標準として、追い出すために三分ある いは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四分 であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けても 空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 $(1\zw)$ に直します。

[2008-02-18] english π

[2014-05-14 LTJ] \ltjsetparameter の実行は時間がかかるので、\ltjsetkanjiskip と \ltjsetxkanjiskip (両者とも, 実行前には \ltj@setpar@global の実行が必要) に しました。

[2014-12-24 LTJ] jsclasses では、 \@setfontsize 中で xkanjiskip を設定するのは 現在の和欧文間空白の自然長が正の場合だけでした。1tjsclasses では最初からこの判定 が抜けてしまっていたので、復活させます。

```
288 \def\@setfontsize#1#2#3{%
```

```
289 % \@nomath#1%
```

\ifx\protect\@typeset@protect 290

\let\@currsize#1% 291

292

\fontsize{#2}{#3}\selectfont 293

\ifdim\parindent>\z@

\if@english 295

296 \parindent=1em

\else 297

\parindent=1\zw 298

299 \fi

\fi 300

\ltj@setpar@global 301

\ltjsetkanjiskip\z@ plus .1\zw minus .01\zw 302

\@tempskipa=\ltjgetparameter{xkanjiskip} 303

\ifdim\@tempskipa>\z@

```
\if@slide
               305
               306
                       \ltjsetxkanjiskip .1em
               307
               308
                       \ltjsetxkanjiskip .25em plus .15em minus .06em
               309
                   fi
               310
\ltjs@setfontsize クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した ltjs@setfontsize を\@setfontsize の
                変わりに用いることにします。
               311 \def\ltjs@setfontsize#1#2#3{%
               312 \@setfontsize#1{#2\ltjs@mpt}{#3\ltjs@mpt}}
                  これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は, \emergencystretch に訴え
                ます。
               313 \emergencystretch 3\zw
```

\ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines \widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対して、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。

TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

[2015-01-07 LTJ] 遅くなりましたが、http://oku.edu.mie-u.ac.jp/tex/mod/forum/discuss.php?d=1005 にあった ZR さんのパッチを取り込みました。

 $314 \newif \ifnarrow baselines$

 $315 \setminus if@english$

316 \narrowbaselinestrue

317 \fi

318 \def\narrowbaselines{%

 ${\tt 319} \quad \verb|\narrowbaselinestrue|$

320 \skip0=\abovedisplayskip

321 \skip2=\abovedisplayshortskip

 $322 \quad \verb|\skip4=\belowdisplayskip| \\$

 ${\tt 323} \quad \verb|\skip6=| belowdisplayshortskip| }$

324 \@currsize\selectfont

325 \abovedisplayskip=\skip0

326 \abovedisplayshortskip=\skip2

327 \belowdisplayskip=\skip4

328 \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}

 $329 \label{lem:cont} $$329 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}$$

330 \def\ltj@@ifnarrowbaselines{%

 $331 \quad \verb|\ifnarrowbaselines| expandafter| @firstoftwo$

332 \else \expandafter\@secondoftwo

333 \fi

334 }

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アスキーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、ここでは 16 ポイントにしました。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント(アスキーのものの 0.961 倍)であることもあり、行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際、 $16/9.25\approx 1.73$ であり、和文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75)に近づきました。

- 335 \renewcommand{\normalsize}{%
- 336 \ltj@@ifnarrowbaselines
- 337 {\ltjs@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt}%
- 338 {\ltjs@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}}%

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip),数式の下のアキ(\belowdisplayshortskip)の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T_{EX} Q & A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調節してみることにしました。

- 339 \abovedisplayskip 11\ltjs@mpt \@plus3\ltjs@mpt \@minus4\ltjs@mpt
- 340 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\ltjs@mpt
- 341 \belowdisplayskip 9\ltjs@mpt \@plus3\ltjs@mpt \@minus4\ltjs@mpt
- 342 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

最後に、リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を、\@listi にコピーしておきます。\@listI の設定は後で出てきます。

343 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

344 \mcfamily\selectfont\normalsize

\Cht 基準となる長さの設定をします。lltjfont.styで宣言されているパラメータに実際の値を \Cdp 設定します。たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅 (1\zw) です。

\Cwd 345 \setbox0\hbox{\char"3000}% 全角スペース

346 \setlength\Cht{\ht0}

347 \setlength\Cdp{\dp0}

\Chs $_{348} \ \text{cetlength}\ \text{Cwd}\ \text{wd0}$

- 349 \setlength\Cvs{\baselineskip}
- $350 \stlength\Chs\{\wd0\}$

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば $16\times0.9=14.4$ ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ 4 ± 2 , 2 ± 1 ポイントでしたが,ここではゼロ(\z0)にしました。

- $351 \mbox{ \newcommand{\small}{\mbox{\small}}}$
- 352 \ltj@@ifnarrowbaselines
- 353 %<!kiyou> {\ltjs@setfontsize\small\@ixpt{11}}%
- 354 % hiyou {\ltjs@setfontsize\small{8.8888}{11}}%
- 355 %<!kiyou> {\ltjs@setfontsize\small\@ixpt{13}}%

```
{\ltjs@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}}%
             356 %<kiyou>
             357
                  \abovedisplayskip 9\ltjs@mpt \@plus3\ltjs@mpt \@minus4\ltjs@mpt
                  \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\ltjs@mpt
             358
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip
             359
                  \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
             360
                  \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
             361
                             \topsep \z@
             362
             363
                             \parsep \z@
                             \itemsep \parsep}}
             364
\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は,元はそれぞれ3\pm 1,2\pm 1 ポイン
              トでしたが、ここではゼロ(\z0)にしました。
             365 \newcommand{\footnotesize}{%
             366 \ltj@@ifnarrowbaselines
             367 %<!kiyou>
                            {\ltjs@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}}%
             368 %<kiyou>
                           {\ltjs@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}}%
             369 %<!kiyou>
                            {\ltjs@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}}%
             370 %<kiyou>
                           {\ltjs@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}}%
                  \abovedisplayskip 6\ltjs@mpt \@plus2\ltjs@mpt \@minus3\ltjs@mpt
             371
                  \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\ltjs@mpt
             372
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip
                  \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
             374
                  \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
             375
             376
                             \topsep \z@
                             \parsep \z@
             377
             378
                             \itemsep \parsep}}
             それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
 \scriptsize
              ます。特に注意すべきは \large で、これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い、
       \tinv
              行送りを \normalsize と同じにすることによって, 節見出しが複数行にわたっても段間で
      \large
              行が揃うようにします。
      \Large
                [2004-11-03] \HUGE を追加。
      \LARGE
             379 \verb|\command{\scriptsize}| {\ltjs@setfontsize\scriptsize\@viipt\end{command}}
       \huge
             380 \newcommand{\tiny}{\ltjs@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
       \Huge _{381} \if@twocolumn
       \HUGE 382 % !kiyou> \newcommand{\large}{\ltjs@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
             383 %<kiyou> \newcommand{\large}{\ltjs@setfontsize\large{11.111}{\n@baseline}}
             384 \else
             385 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\ltjs@setfontsize\large\@xiipt{17}}
             386 %<kiyou> \newcommand{\large}{\ltjs@setfontsize\large{11.111}{17}}
             387\fi
             388 %<!kiyou>\newcommand{\Large}{\ltjs@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
             389 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\ltjs@setfontsize\Large{12.222}{21}}
             390 \end{\LARGE} {\ltjs@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}} \\
             391 \newcommand{\huge}{\ltjs@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
             392 \newcommand{\Huge}{\ltjs@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
             393 \newcommand{\HUGE}{\ltjs@setfontsize\HUGE{30}{40}}
```

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは, 行列や 場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送り が変わるような大きいものを使わず、行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがい いでしょう。

394 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく、\headfont という命令で定めること にします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが, 通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。 \mathbb{F}_{p} I $^{-1}$ T=X $^{-1}$ 2 $_{\mathcal{E}}$ 2 $_{\mathcal{E$ 成入門』(1997年)では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが, \fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

- 395 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}
- 396 \newcommand{\headfont}{\gtfamily\sffamily}
- 397 % \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}

6 レイアウト

■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが, 2\zw にしまし \columnseprule た。このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

- 398 %<!kiyou>\setlength\columnsep{2\zw}
- 399 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}
- 400 \setlength\columnseprule{\z0}

■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら, \lineskip より近づかないようにし \normallineskip ます。元は Opt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

 $\verb|\lineskiplimit|| 401 \verb|\lineskip{1\lineskip{1\lineskip}}|$

- \normallineskiplimit 402 \setlength\normallineskip{1\ltjs@mpt}
 - 403 \setlength\lineskiplimit{1\ltjs@mpt}
 - 404 \setlength\normallineskiplimit{1\ltjs@mpt}

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

\renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の2倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行 送りの伸縮はしないのが一般的です。

405 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は Opt plus 1pt になっていましたが、ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

 $406 \verb|\setlength| parskip{\z@}$

 $407 \if@slide$

408 \setlength\parindent{0\zw}

 $409 \ensuremath{\setminus} else$

410 \setlength\parindent{1\zw}

411 \fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう \@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

 $\0$

413 \@medpenalty 151

414 \@highpenalty 301

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

415 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。

416 % \brokenpenalty 100

6.1 ページレイアウト

■縦方向のスペース

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値 \topskip にすると、本文中に \int のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のペー ジより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

> [2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで、元は12pt でしたが、新ドキュメントクラ スでは \topskip と等しくしていました。ところが、fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようですので、2倍に増やしました。代わりに、版面の上下 揃えの計算では \headheight ではなく \topskip を使うことにしました。

417 \setlength\topskip{10\ltjs@mpt}

418 \if@slide

419 \setlength\headheight{0\ltjs@mpt}

420 \else

421 \setlength\headheight{2\topskip}

422 \fi

\footskip \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは、book で 0.35in (約8.89mm), book 以外で30pt (約10.54mm) となっていましたが,ここではA4 判のときちょうど 1cm となるように、\paperheight の 0.03367 倍 (最小 \baselineskip) としました。書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。

423 %<*article|kiyou>

```
424 \if@slide
         425 \setlength\footskip{\z0}
              \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
         427
              \ifdim\footskip<\baselineskip
         428
                 \verb|\setlength| footskip{\baselineskip}|
         429
              \fi
         430
         431 \fi
         432 %</article|kiyou>
         433 %<jspf>\setlength\footskip{9mm}
         434 %<*book>
         435 \if@report
              \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
              \ifdim\footskip<\baselineskip
         437
         438
                 \setlength\footskip{\baselineskip}
         439
              \fi
         440 \else
              \setlength\footskip{\z0}
         442 \fi
         443 %</book>
\headsep \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), そ
          れ以外で25pt (約8.79mm) になっていました。ここでは article は \footskip - \topskip
          としました。
         444 %<*article>
         445 \footnote{of}
         446 \quad \texttt{\setlength\headsep\{0\ltjs@mpt\}}
         447 \else
              \setlength\headsep{\footskip}
              \addtolength\headsep{-\topskip}
         449
         450 \fi
         451 %</article>
         452 %<*book>
         453 \if@report
              \verb|\ength>headsep{\footskip}|
              \addtolength\headsep{-\topskip}
         455
         456 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}
              \setlength\headsep{6mm}
         457
         458 \fi
         459 %</book>
         460 %<*jspf>
         461 \setlength\headsep{9mm}
         462 \verb|\addtolength\headsep{-\topskip}|
         463 %</jspf>
         464 %<*kiyou>
         465 \verb|\ength\headheight{0\ltjs@mpt}|
         466 \setlength\headsep{0\ltjs@mpt}
         467 %</kiyou>
```

\maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain TEX や IATEX 2.09 では 4pt に固定でした。IATEX2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ(ここでは 10pt)に等しいので、結局 \maxdepth は \topskip の半分の値(具体的には 5pt)にします。

 $468 \stlength\maxdepth{.5\topskip}$

■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。

469 \newdimen\fullwidth

この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍 (二段組では全角幅の偶数倍) にします。 0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から 約 2 インチを引いた値になるように選びました。 book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。article では A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50\zw(25 文字 ×2 段)+段間 8mm とします。

470 %<*article>

471 \if@slide

472 \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}

473 \else

474 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}

475 \fi

476 \if@twocolumn \@tempdima=2\zw \else \@tempdima=1\zw \fi

477 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima

478 \setlength\textwidth{\fullwidth}

479 %</article>

480 %<*book>

 $481 \if@report$

482 1

 $483 \ensuremath{\setminus} else$

 $484 \quad \texttt{\setlength\fullwidth\{\paperwidth\}}$

485 \addtolength\fullwidth{-36mm}

486 \fi

487 \if@twocolumn \@tempdima=2\zw \else \@tempdima=1\zw \fi

 $488 \verb|\divide| fullwidth \verb|\dtempdima| \verb|\multiply| fullwidth \verb|\dtempdima|$

 $489 \setlength\textwidth{fullwidth}$

490 \if@report \else

491 \if@twocolumn \else

492 \ifdim \fullwidth>40\zw

493 \setlength\textwidth{40\zw}

```
494
       \fi
495
     \fi
496 \fi
497 %</book>
498 %<*jspf>
499 \setlength\fullwidth{50\zw}
500 \addtolength\fullwidth{8mm}
501 \setlength\textwidth{\fullwidth}
502 %</jspf>
503 %<*kiyou>
504 \setlength\fullwidth{48\zw}
505 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
506 \setlength\textwidth{\fullwidth}
507 %</kiyou>
```

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と \textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は、紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、\topskip を引き、それを \baselineskip の倍数に切り捨て、最後に \topskip を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

```
508 %<*article|book>
509 \if@slide
510 \setlength{\textheight}{0.95\paperheight}
511 \else
                          \setlength{\textheight}{0.83\paperheight}
512
514 \ \d \c) {-\topskip}
515 \addtolength{\textheight}{-\headsep}
516 \addtolength{\textheight}{-\footskip}
517 \addtolength{\textheight}{-\topskip}
518 \divide\textheight\baselineskip
519 \multiply\textheight\baselineskip
520 %</article|book>
521 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}
522 %<kiyou>\setlength{\textheight}{47\baselineskip}
523 \addtolength{\textheight}{\topskip}
524 \label{lem:condition} 524 \label{lem:condition} 524 \label{lem:condition} $$ 10.1 \le 0.1 \le 
525 %<jspf>\setlength{\mathindent}{10mm}
```

\marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。\marginparpush は欄外の書き込 \marginparpush みどうしの最小の間隔です。

526 \setlength\marginparsep{\columnsep}

527 \setlength\marginparpush{\baselineskip}

\oddsidemargin それぞれ奇数ページ、偶数ページの左マージンから 1 インチ引いた値です。片面印刷では \evensidemargin が使われます。TEX は上・左マージンに 1truein を挿入しますが、トンボ関係のオプションが指定されると lltjcore.sty はトンボの内側に 1in のスペース (1truein ではなく)を挿入するので、場合分けしています。

[2011-10-03 LTJ] LuaTeX (pdfTeX?) では 1truein ではなく 1in になるようです。

- 528 \setlength{\oddsidemargin}{\paperwidth}
- $529 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}$
- 530 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}
- $531 \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}$
- 532 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
- 533 \if@mparswitch
- 534 \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}
- 535 \addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}
- 536 \fi

\marginparwidth \marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅(\evensidemargin +
1 インチ) から 1 センチを引き、さらに \marginparsep(欄外の書き込みと本文のアキ)を
引いた値にしました。最後に 1\zw の整数倍に切り捨てます。

- 537 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}
- 538 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}
- 539 \addtolength\marginparwidth{-1in}
- 540 \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}
- 541 \addtolength\marginparwidth{-1cm}
- $542 \add to length \mbox{margin parwidth $\{-\mbox{margin parsep}\}$}$
- $543 \ensuremath{\texttt{0tempdima=1}zw}$
- $544 \divide\marginparwidth\@tempdima$
- 545 \multiply\marginparwidth\@tempdima

\topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離)から1インチ引いた値です。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2011-10-03 LTJ] ここも \oddsidemargin のときと同様に -\inv@mag in ではなく-1in にします。

- $546 \ensuremath{\topmargin{\paperheight\}}}$
- 547 \addtolength\topmargin{-\textheight}
- $548 \footnote{off}$
- 550 \else
- 551 \addtolength\topmargin{-\topskip}
- 552\fi
- 553 \addtolength\topmargin{-\headsep}
- $554 \d \d \c) footskip}$
- 555 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
- 556 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
- 557 \addtolength\topmargin{-1in}

■脚注

 $558 {\footnotesize\global\setlength\footnotesep{\baselineskip}}$

559 \setlength\footnotesep{0.7\footnotesep}

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが、和文の行送りを考えてもうちょっと大きくします。

560 \setlength{\skip\footins}{16\ltjs@mpt \@plus 5\ltjs@mpt \@minus 2\ltjs@mpt}

■フロート関連 フロート(図,表)関連のパラメータは IATEX 2ε 本体で定義されていますが,ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)ちなみに,カウンタは内部では \c0 を名前に冠したマクロになっています。とフロートだけのページで設定が異なります。

\c@topnumber topnumber カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。 $[2003\text{-}08\text{-}23] \ \ \texttt{5} \ \texttt{5}$

561 \setcounter{topnumber}{9}

\topfraction 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

 $562 \verb|\renewcommand{\topfraction}{\{.85\}}$

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

563 \setcounter{bottomnumber}{9}

\bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

 $564 \mbox{\command{$

 $\column{totalnumber}{c$

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

565 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2 を 0.1 に変えました。

566 \renewcommand{\textfraction}{.1}

 $\footpage fraction$ フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。

567 \renewcommand{\floatpagefraction}{.8}

\c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

[2003-06-23] りょうと増くしょした。

568 \setcounter{dbltopnumber}{9}

24

\dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7 を 0.8 に変えてあります。

569 \renewcommand{\dbltopfraction}{.8}

\dblfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8 に変えてあります。

570 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}

\floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・\textfloatsep 下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本

\intextsep 文との距離です。

571 \setlength\floatsep {12\ltjs@mpt \@plus 2\ltjs@mpt \@minus 2\ltjs@mpt} 572 \setlength\textfloatsep{20\ltjs@mpt \@plus 2\ltjs@mpt \@minus 4\ltjs@mpt} 573 \setlength\intextsep {12\ltjs@mpt \@plus 2\ltjs@mpt \@minus 2\ltjs@mpt}

\dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。

\dbltextfloatsep 574 \setlength\dblfloatsep {12\ltjs@mpt \@plus 2\ltjs@mpt \@minus 2\ltjs@mpt} 575 \setlength\dbltextfloatsep{20\ltjs@mpt \@plus 2\ltjs@mpt \@minus 4\ltjs@mpt}

\@fptop フロートだけのページに入るグルーです。\@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部,

\Ofpsep \Ofpsep はフロート間に入ります。

\@fpbot 576 \setlength\@fptop{0\ltjs@mpt \@plus 1fil}

577 \setlength\@fpsep{8\ltjs@mpt \@plus 2fil}

 $578 \ensuremath{\texttt{O}\t} \ensuremath{\texttt{O}\t} \ensuremath{\texttt{O}\t}$

\@dblfptop 段抜きフロートについての値です。

\@dblfpsep 579 \setlength\@dblfptop{0\ltjs@mpt \@plus 1fil}

\@dblfpbot 580 \setlength\@dblfpsep{8\ltjs@mpt \@plus 2fil}

581 \setlength\@dblfpbot{0\ltjs@mpt \@plus 1fil}

7 ページスタイル

ページスタイルとして, $IAT_{EX}\,2_{\varepsilon}$ (欧文版)の標準クラスでは empty, plain,headings,myheadings があります。このうち empty,plain スタイルは $IAT_{EX}\,2_{\varepsilon}$ 本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが, ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps@... の形のマクロで定義されています。

| Cevenhead | Coddhead, | Coddfoot, | Cevenhead, | Cevenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

\@oddhead フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。

\@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

\@oddfoot 柱の内容は、\chapter が呼び出す \chaptermark{何々}、\section が呼び出す \sectionmark{何々} で設定します。柱を扱う命令には次のものがあります。

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右} 右の柱を設定します。

\leftmark 左の柱を出力します。

\rightmark 右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

\ps@empty empty ページスタイルの定義です。 IAT_{EX} 本体で定義されているものをコメントアウトした形で載せておきます。

- 582 % \def\ps@empty{%
- 583 % \let\@mkboth\@gobbletwo
- 584 % \let\@oddhead\@empty
- 585 % \let\@oddfoot\@empty
- 586 % \let\@evenhead\@empty
- 587 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

- 588 \def\ps@plainfoot{%
- 589 \let\@mkboth\@gobbletwo
- 590 \let\@oddhead\@empty
- 591 \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}%
- 592 \let\@evenhead\@empty
- 593 \let\@evenfoot\@oddfoot}
- 594 \def\ps@plainhead{%
- 595 \let\@mkboth\@gobbletwo
- 596 \let\@oddfoot\@empty
- 597 \let\@evenfoot\@empty
- $598 \ \def\@evenhead{\%}$
- 599 \if@mparswitch \hss \fi
- 600 \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
- 601 \if@mparswitch\else \hss \fi}%
- 602 \def\@oddhead{%
- 603 \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
- $604 \label{lem:condition} $604 \cdots \left(\cdots \right) \cdots $$ \left(\cdots \cdots \right) \cdots \cd$

\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン ダーラインを引くようにしてみました。

まず article の場合です。

606 %<*article|kiyou>

```
607 \footnotemark 607 \if@twoside
608
     \def\ps@headings{%
       \let\@oddfoot\@empty
609
       \let\@evenfoot\@empty
610
       \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
611
         \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
612
         \if@mparswitch\else \hss \fi}%
613
614
       \def\@oddhead{%
         \underline{%
615
           \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
616
617
       \let\@mkboth\markboth
       \def\sectionmark##1{\markboth{%
618
          \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\zw\fi
619
          ##1}{}}%
620
       \def\subsectionmark##1{\markright{%
621
622
          \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection \hskip1\zw\fi
          ##1}}%
623
624
625 \ge \% if not twoside
     \def\ps@headings{%
626
627
       \let\@oddfoot\@empty
       \def\@oddhead{%
628
629
         \underline{%
           \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
630
       \let\@mkboth\markboth
631
       \def\sectionmark##1{\markright{%
632
           \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\zw\fi
633
634
           ##1}}}
635 \fi
636 %</article|kiyou>
   次は book の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませ
ていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。
637 %<*book>
638 \newif\if@omit@number
639 \def\ps@headings{%
640
     \let\@oddfoot\@empty
     \let\@evenfoot\@empty
641
642
     \def\@evenhead{%
       \if@mparswitch \hss \fi
643
       \underline{\hbox to \fullwidth{\ltjsetparameter{autoxspacing={true}}}
644
           \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
645
646
       \if@mparswitch\else \hss \fi}%
     \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\ltjsetparameter{autoxspacing={true}}}
647
           {\if@twoside\rightmark\else\leftmark\fi}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
648
649
     \let\@mkboth\markboth
     \def\chaptermark##1{\markboth{%
650
651
       \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
652
         \if@mainmatter
```

```
\if@omit@number\else
              654
                          \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\zw
              655
                      \fi
              656
                    \fi
              657
                    ##1}{}}%
              658
                   \def\sectionmark##1{\markright{%
              659
                     \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\zw\fi
                    ##1}}}%
              661
              662 %</book>
                 最後は学会誌の場合です。
              663 %<*jspf>
              664 \def\ps@headings{%
                  \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
                  \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
              666
                  \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
                  \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
              668
              669 %</jspf>
\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するた
               め,ここでの定義は非常に簡単です。
                 [2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。
              670 \def\ps@myheadings{%
                  \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
                  \def\@evenhead{%
              672
                    \if@mparswitch \hss \fi%
              673
              674
                    \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
              675
                    \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                  \def\@oddhead{%
              676
              677
                    \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%
                  \let\@mkboth\@gobbletwo
              679 % <book> \let\chaptermark\@gobble
              680 \let\sectionmark\@gobble
              681 %<!book> \let\subsectionmark\@gobble
              682 }
                   文書のマークアップ
```

8.1 表題

653

\title これらは IATeX 本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示 \author Ust. \date 683 % \newcommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}} 684 % \newcommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}} $685 \% \ensuremath{\mbox{\date}[1]_{\gdef\@date{\#1}}}$ 686 % \date{\today}

```
\etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル,英語の著者名,キーワード,メールアドレスです。
      \eauthor 687 %<*jspf>
              688 \newcommand*{\etitle}[1]{\gdef\@etitle{#1}}
     \keywords
              689 \newcommand*{\eauthor}[1]{\gdef\@eauthor{#1}}
              690 \newcommand*{\keywords}[1]{\gdef\@keywords{#1}}
              691 \newcommand*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}
              692 \newcommand*{\AuthorsEmail}[1]{\gdef\authors@mail{author's e-mail:\ #1}}
              693 %</jspf>
              従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ
\plainifnotempty
               plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle
               {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが
               empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにし
               ます。
              694 \def\plainifnotempty{%
                  \ifx \@oddhead \@empty
              695
                    \ifx \@oddfoot \@empty
              696
              697
                    \else
              698
                      \thispagestyle{plainfoot}%
              699
                    \fi
                  \else
              700
                    \thispagestyle{plainhead}%
              701
                  \fi}
              702
     \maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は,欧文の標準クラスファイルでは \large,和
               文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。
              703 %<*article|book|kiyou>
              704 \if@titlepage
                  \newcommand{\maketitle}{%
              705
              706
                    \begin{titlepage}%
              707
                      \let\footnotesize\small
                      \let\footnoterule\relax
              708
              709
                      \let\footnote\thanks
                      \null\vfil
              710
              711
                      \if@slide
                        {\footnotesize \@date}%
              712
                       \begin{center}
              713
                         \mbox{} \\[1\zw]
              714
              715
              716
                         {\maybeblue\hrule height0\ltjs@mpt depth2\ltjs@mpt\relax}\par
              717
                         \smallskip
                         \@title
              718
              719
                         \smallskip
              720
                         \vfill
              721
                         {\small \@author}%
              722
                       \end{center}
              723
              724
                      \else
```

```
\vskip 60\ltjs@mpt
725
                         \begin{center}%
726
727
                               {\LARGE \@title \par}%
                               \vskip 3em%
728
729
                               {\large
                                    \lineskip .75em
730
                                    \begin{tabular}[t]{c}%
731
732
                                          \@author
                                    \end{tabular}\par}%
733
                               \vskip 1.5em
734
                               {\large \@date \par}%
735
                         \end{center}%
736
                         \fi
737
                         \par
738
739
                         \@thanks\vfil\null
740
                    \end{titlepage}%
                    \setcounter{footnote}{0}%
741
                    \global\let\thanks\relax
742
743
                    \global\let\maketitle\relax
                    \global\let\@thanks\@empty
744
745
                    \global\let\@author\@empty
                    \global\let\@date\@empty
746
747
                    \global\let\@title\@empty
748
                    \global\let\title\relax
                    \global\let\author\relax
749
                    \global\let\date\relax
750
                    \global\let\and\relax
751
752
             }%
753 \else
              \newcommand{\maketitle}{\par
754
                    \begingroup
755
756
                         \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
                         \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
757
758
                         \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\zw
                               \parindent 1\zw\noindent
759
                               \label{lap(dextsuperscript{\normalfont\dthefnmark}\hskip0.3\zw} $$\#1}\%$ in $$\mathbb{C}^{0}$. The property of the following the property of the pr
760
                         \if@twocolumn
761
                               \ifnum \col@number=\@ne
762
                                    \@maketitle
763
                               \else
764
                                    \twocolumn[\@maketitle]%
765
                               \fi
766
                         \else
767
768
                               \newpage
769
                               \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
                               \@maketitle
770
771
                         \plainifnotempty
772
                         \@thanks
773
```

```
774
                                                 \endgroup
                              775
                                                 \setcounter{footnote}{0}%
                              776
                                                 \global\let\thanks\relax
                                                 \global\let\maketitle\relax
                              777
                                                 \global\let\@thanks\@empty
                              778
                                                 \global\let\@author\@empty
                              779
                                                 \global\let\@date\@empty
                              780
                               781
                                                 \global\let\@title\@empty
                                                 \global\let\title\relax
                              782
                                                 \global\let\author\relax
                              783
                               784
                                                 \global\let\date\relax
                                                 \global\let\and\relax
                               785
                               786
                                          }
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
                              787
                                            \def\@maketitle{%
                              788
                                                 \newpage\null
                                                 \vskip 2em
                               789
                               790
                                                 \begin{center}%
                                                      \let\footnote\thanks
                              791
                               792
                                                      {\LARGE \@title \par}%
                                                      \vskip 1.5em
                              793
                              794
                                                      {\large
                               795
                                                           \lineskip .5em
                                                           \begin{tabular}[t]{c}%
                              796
                                                                \@author
                               797
                                                           \end{tabular}\par}%
                               798
                                                      \vskip 1em
                               799
                              800
                                                      {\large \@date}%
                                                 \end{center}%
                              801
                                                 \par\vskip 1.5em
                              802
                              803 %<article|kiyou>
                                                                                         \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
                              804 }
                               805 \fi
                              806 %</article|book|kiyou>
                              807 %<*jspf>
                              \begingroup
                              809
                              810
                                                 \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
                                                 \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
                              811
                              812
                                                 \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\zw
                              813
                                                      \parindent 1\zw\noindent
                                                      \label{the continuous continuou
                              814
                                                      \twocolumn[\@maketitle]%
                              815
                              816
                                                 \plainifnotempty
                                                 \@thanks
                              817
                                            \endgroup
                              818
                                            \setcounter{footnote}{0}%
                              819
                                            \global\let\thanks\relax
                              820
```

```
821
              \global\let\maketitle\relax
822
              \global\let\@thanks\@empty
              \global\let\@author\@empty
823
              \global\let\@date\@empty
824
825 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
              \global\let\title\relax
826
              \global\let\author\relax
827
              \global\let\date\relax
              \global\let\and\relax
829
              \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
830
                    \def\@makefntext{\advance\leftskip 3\zw \parindent -3\zw}%
831
                   \label{lem:condition} $$\footnotetext[0]{\titshape\authors@mail}%$
832
              fi
833
              \global\let\authors@mail\@undefined}
834
835 \def\@maketitle{%
              \newpage\null
836
              \ vskip 6em % used to be 2em
837
              \begin{center}
838
839
                   \let\footnote\thanks
                   \label{large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-lar
840
841
                   \lineskip .5em
                   \ifx\@author\@undefined\else
842
843
                         \vskip 1em
                         \begin{tabular}[t]{c}%
844
                               \@author
845
                         \end{tabular}\par
846
                   \fi
847
                    \ifx\@etitle\@undefined\else
848
849
                         \vskip 1em
                         {\large \@etitle \par}%
850
851
852
                   \ifx\@eauthor\@undefined\else
                         \vskip 1em
853
854
                         \begin{tabular}[t]{c}%
                               \@eauthor
855
                         \end{tabular}\par
856
857
                   \fi
                   \vskip 1em
858
                   \@date
859
              \end{center}
860
861
              \vskip 1.5em
862
              \centerline{\box\@abstractbox}
              \ifx\@keywords\@undefined\else
863
                   \vskip 1.5em
864
865
                   \centerline{\parbox{157mm}{\textkeywords:}}\ \space{2.20} \label{line}
866
              \fi
              \vskip 1.5em}
868 %</jspf>
```

8.2 章・節

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして * と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} * [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です(例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

前アキ この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

後アキ 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

* この*印がないと、見出し番号を付け、見出し番号のカウンタに1を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6 個の引数として定義されます。

次は ****@startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが ****baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

- 869 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%
- 870 \if@noskipsec \leavevmode \fi
- 871 \par
- 872% 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
- 873 \@tempskipa #4\relax
- 874% \Cafterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
- \$75 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
- 876% 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
- $\ \$ \ifdim \@tempskipa <\z@
- 878 \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
- 879 \fi
- 880 \if@nobreak
- 881 \everypar{}%
- 882 \else
- 883 \addpenalty\@secpenalty
- 884%次の行は削除
- 885 % \addvspace\@tempskipa

```
886%次の \noindent まで追加
       \ifdim \@tempskipa >\z@
887
888
         \if@slide\else
           \null
889
           \vspace*{-\baselineskip}%
890
         \fi
891
         \vskip\@tempskipa
892
893
     \fi
894
     \noindent
895
896 % 追加終わり
     \@ifstar
897
898
       {\c {\c 43}{\#4}{\#5}{\#6}}%
       {\@dblarg{\@sect{#1}{#2}{#3}{#4}{#5}{#6}}}}
899
  \@sect と \@xsect は,前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように,多少変え
 てあります。
900 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
     \ifnum #2>\c@secnumdepth
901
902
       \let\@svsec\@empty
    \else
903
904
       \refstepcounter{#1}%
       \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
905
906
907% 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #5\relax
909 % 条件判断の順序を入れ換えました
    \ifdim \@tempskipa<\z@
       \def\@svsechd{%}
911
         #6{\hskip #3\relax
912
         \@svsec #8}%
913
         \csname #1mark\endcsname{#7}%
914
915
         \addcontentsline{toc}{#1}{%
           \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
916
917
             \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
918
           #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
919
920
     \else
       \begingroup
921
         \interlinepenalty \@M % 下から移動
922
923
           \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
924
           \interlinepenalty \@M % 上に移動
925 %
           #8\@@par}%
926
       \endgroup
927
928
       \csname #1mark\endcsname{#7}%
       \addcontentsline{toc}{#1}{%
929
         \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
930
           \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
931
```

```
\fi
932
         #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
933
934
     \fi
     \c \xspace (#5)
935
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され,それ
以降は前者が実行されます。
   [2011-10-05 LTJ] LuaT<sub>E</sub>X-ja では \everyparhook は不要なので削除。
936 \def\@xsect#1{%
937% 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
    \@tempskipa #1\relax
939 % 条件判断の順序を変えました
    \ifdim \@tempskipa<\z@
       \@nobreakfalse
941
942
       \global\@noskipsectrue
943
       \everypar{%
         \if@noskipsec
944
           \global\@noskipsecfalse
945
946
          {\c {\tt \c lastbox}} %
           \clubpenalty\@M
947
948
           \begingroup \@svsechd \endgroup
           \unskip
949
950
           \@tempskipa #1\relax
           \hskip -\@tempskipa\@inhibitglue
951
         \else
952
           \clubpenalty \@clubpenalty
953
           \everypar{}%
954
         fi}%
955
956
     \else
       \par \nobreak
957
       \vskip \@tempskipa
958
959
       \@afterheading
     \fi
960
961
     \if@slide
       {\tt \{\vskip-6\ltjs@mpt\maybeblue\hrule\ height0\ltjs@mpt\depth1\ltjs@mpt\vskip7\ltjs@mpt\relax\}}
962
963
     \par % 2000-12-18
964
     \ignorespaces}
965
966 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
     \@tempskipa #3\relax
967
968
     \ifdim \@tempskipa<\z@
       \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
969
970
     \else
       \begingroup
971
972
         #4{%
           \@hangfrom{\hskip #1}%
973
974
             \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
       \endgroup
975
976
     \fi
```

977 \@xsect{#3}}

■柱関係の命令

```
\chaptermark \...mark の形の命令を初期化します(第7節参照)。 \chaptermark 以外は IATFX 本体で
\sectionmark 定義済みです。
```

\subsectionmark 978 \newcommand*\chaptermark[1]{}

\subsubsectionmark\ \frac{979 \ \newcommand*{\sectionmark}[1]{}}

980 % \newcommand*{\subsectionmark}[1]{}

 $\label{lem:paragraphmark} $$ \pi_{981} \% \end{*{\subsubsectionmark}[1]{}} $$$

 $\verb|\subparagraphmark| 982 \% \verb|\newcommand*{\paragraphmark}[1]{}|$

983 % \newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}

■カウンタの定義

\c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。

984 %<!book>\setcounter{secnumdepth}{3}

985 % <book > \setcounter { secnumdepth } {2}

\c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは

\cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。

\c@subsection 986 \newcounter{part}

\c@subsubsection 987 %<book>\newcounter{chapter} 988 %<book>\newcounter{section}[chapter]

\c@paragraph $_{989}$ %<!book>\newcounter{section}

\c@subparagraph 990 \newcounter{subsection}[section]

991 \newcounter{subsubsection} [subsection]

992 \newcounter{paragraph}[subsubsection]

993 \newcounter{subparagraph} [paragraph]

\thepart カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。

カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。 \thechapter

\thesection \arabic{COUNTER} 1, 2, 3, ...

\thesubsection i, ii, iii, ... \roman{COUNTER}

\thesubsubsection I, II, III, ... \Roman{COUNTER}

\theparagraph \alph{COUNTER} a, b, c, ... \thesubparagraph A, B, C, ... \Alph{COUNTER}

一, 二, 三, ... \kansuji{COUNTER}

以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。

- 994 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
- 995 %<!book>% \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
- 996 %<!book>\renewcommand{\thesection}{\presectionname\@arabic\c@section\postsectionname}
- 997 %<!book>\renewcommand{\thesubsection}{\@arabic\c@section.\@arabic\c@subsection}
- 998 %<*book>
- 999 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}

```
1000 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
           1001 \verb|\command{\the subsection}{\the section.\color=0.023} \\
           1002 %</book>
           1003 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                  \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
           1005 \renewcommand{\theparagraph}{%
                 \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
           1006
           1007 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                 \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
           \@chapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
  \@chapapp
              \Ochappos の初期値は \postchaptername(章)です。
  \@chappos
              \appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。
              [2003-03-02] \@secapp は外しました。
           1009 % <book > \newcommand { \@chapapp} { \prechaptername}
           1010 %<book>\newcommand{\@chappos}{\postchaptername}
            ■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」,それ以外が「前付」「後付」です。
\frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。
           1011 %<*book>
           1012 \newcommand\frontmatter{%
                \if@openright
           1013
           1014
                  \cleardoublepage
           1015
                \else
           1016
                  \clearpage
           1017
                \fi
           1018
                \@mainmatterfalse
                \pagenumbering{roman}}
 \mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。
           1020 \newcommand\mainmatter{%
           1021 % \if@openright
                  \cleardoublepage
           1023 % \else
           1024 %
                  \clearpage
           1025 % \fi
           1026
                \@mainmattertrue
                \pagenumbering{arabic}}
 \backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。
           1028 \newcommand\backmatter{%
           1029
                \if@openright
                  \cleardoublepage
           1030
           1031
                \else
           1032
                  \clearpage
           1033
                \@mainmatterfalse}
           1034
           1035 %</book>
```

■部

1061 %<*!book>

1062 \def\@part[#1]#2{%

\part 新しい部を始めます。 \secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。 \secdef{星なし}{星あり} 星なし * のない形の定義です。 星あり * のある形の定義です。 \secdef は次のようにして使います。 \def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB } [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義 \def\CMDA \def\CMDB % \chapter*{...} の定義 #1{....} まず book クラス以外です。 1036 %<*!book> 1037 \newcommand\part{% \if@noskipsec \leavevmode \fi 1039 \par 1040 \addvspace{4ex}% \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi $1042 \ \scale \part\end{0.00} \$ 1043 %</!book> book スタイルの場合は、少し複雑です。 1044 %<*book> 1045 \newcommand\part{% \if@openright 1046 \cleardoublepage 1047 1048 \else 1049 \clearpage 1050 1051\thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain \if@twocolumn 1052 \onecolumn \@restonecoltrue 1054 1055 \else \@restonecolfalse 1056 \fi 1057 \null\vfil 1058 \secdef\@part\@spart} 10591060 %</book> \@part 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。

book クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付けます。

```
\ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
       1063
       1064
               \refstepcounter{part}%
       1065
               \addcontentsline{toc}{part}{%
                 \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\zw}#1}%
       1066
       1067
             \else
               \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
       1068
             \fi
       1069
       1070
             \mathbb{}{}
             {\parindent\z@
       1071
               \raggedright
       1072
               \interlinepenalty \@M
       1073
               \n
       1074
               \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
       1075
                 \Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname
       1076
       1077
                 \par\nobreak
       1078
               \fi
               \huge \headfont #2%
       1079
               \markboth{}{}\par}%
       1080
       1081
             \nobreak
             \vskip 3ex
       1082
             \@afterheading}
       1084 %</!book>
           book クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
       1085 %<*book>
       1086 \def\@part[#1]#2{%
             \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
       1087
       1088
               \refstepcounter{part}%
               \verb|\addcontentsline{toc}{part}{%|}
       1089
       1090
                 \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\zw}#1}%
       1091
             \else
               \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
       1092
             \markboth{}{}%
       1094
             {\centering
       1095
               \interlinepenalty \@M
       1096
               \normalfont
       1097
       1098
               \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
                 \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
       1099
                 \par\vskip20\ltjs@mpt
       1100
       1101
               \fi
       1102
               \Huge \headfont \#2\pi\
             \@endpart}
       1104 %</book>
\@spart 番号を付けない部です。
       1105 %<*!book>
       1106 \def\@spart#1{{%
               \parindent \z@ \raggedright
       1107
```

```
\interlinepenalty \@M
1108
1109
        \normalfont
1110
        \huge \headfont #1\par}%
     \nobreak
1111
      \vskip 3ex
      \@afterheading}
1114 %</!book>
1115 %<*book>
1116 \def\@spart#1{{%
        \centering
1117
        \interlinepenalty \@M
1118
        \n
1119
        \Huge \headfont #1\par}%
     \@endpart}
1121
1122 %</book>
```

\@endpart \@part と **\@spart** の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加しま す。二段組のときには、二段組に戻します。

- 1123 %<*book>
- 1124 \def\@endpart{\vfil\newpage
- 1125 \if@twoside
- 1126 \null
- 1127 \thispagestyle{empty}%
- 1128 \newpage
- 1129 \fi
- 1130 \if@restonecol
- 1131 \twocolumn
- 1132 \fi}
- 1133 %</book>

■章

\chapter 章の最初のページスタイルは、全体が empty でなければ plain にします。また、\@topnum を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。

- 1134 %<*book>
- 1135 \newcommand{\chapter}{%
- 1136 \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi
- 1137 \plainifnotempty % 元: \thispagestyle{plain}
- 1138 \global\@topnum\z@
- 1139 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
- 1140 \secdef
- 1141 {\@omit@numberfalse\@chapter}%
- 1142 {\@omit@numbertrue\@schapter}}

\@chapter 章見出しを出力します。secnumdepth が 0 以上かつ **\@mainmatter** が真のとき章番号を出力します。

- 1143 \def\@chapter[#1]#2{%
- 1144 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne

```
\if@mainmatter
                  1145
                  1146
                            \refstepcounter{chapter}%
                  1147
                            \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                            \addcontentsline{toc}{chapter}%
                  1148
                               {\protect\numberline
                  1149
                              \ {\if@english\thechapter\else\@chapapp\thechapter\@chappos\fi} \% = $$ $$ $$ $$
                  1150
                              {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                  1151
                  1152
                              #1}%
                          \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
                  1153
                  1154
                          \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
                  1155
                        \fi
                  1156
                        \chaptermark{#1}%
                  1157
                        \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\ltjs@mpt}}%
                  1158
                        \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\ltjs@mpt}}%
                  1159
                  1160
                        \if@twocolumn
                          \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
                  1161
                  1162
                        \else
                  1163
                          \@makechapterhead{#2}%
                  1164
                          \@afterheading
                  1165
                        \fi}
 \@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。\bfseries を \headfont に変えました。
                  1166 \def\@makechapterhead#1{%
                        \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                  1167
                        {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                  1168
                          \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                  1169
                  1170
                            \if@mainmatter
                  1171
                               \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                              \par\nobreak
                  1172
                               \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                  1174
                            \fi
                          \fi
                  1175
                  1176
                          \interlinepenalty\@M
                          \Huge \headfont #1\par\nobreak
                  1177
                          \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                  1178
        \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                  1179 \def\@schapter#1{\%}
                        \chaptermark{#1}%
                  1180
                  1181
                        \if@twocolumn
                  1182
                          \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                  1183
                        \else
                          \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                  1184
                        fi
                  1185
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                  1186 \def\@makeschapterhead#1{%
                        \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
```

```
1188
               {\parindent \z@ \raggedright
          1189
                  \normalfont
          1190
                  \interlinepenalty\@M
                  \Huge \headfont #1\par\nobreak
          1191
                  \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
          1193 %</book>
            ■下位レベルの見出し
  \section 欧文版では \@startsection の第4引数を負にして最初の段落の字下げを禁止しています
            が、和文版では正にして字下げするようにしています。
              段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。
          1194 \if@twocolumn
          1195 \newcommand{\section}{%
          1196 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                  \@startsection{section}{1}{\z@}%
          1198 %<!kiyou>
                          \{0.6\Cvs\}\{0.4\Cvs\}\%
          1199 %<kiyou>
                         {\Cvs}{0.5\Cvs}%
          1200 %
                  {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
          1201
                  {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
          1202 \else
               \newcommand{\section}{%
          1203
          1204
                 \if@slide\clearpage\fi
                  \ensuremath{\tt 0startsection{section}{1}{\ensuremath{\tt 1}}{\ensuremath{\tt 20}}\%
          1205
          1206
                 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
                  {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
                  {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
          1208 %
          1209
                  {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
          1210 \fi
\subsection 同上です。
          1211 \if@twocolumn
          1212 \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%
          1213
                  {z0}{z0}%
          1214
                  {\normalfont\normalsize\headfont}}
          1215 \else
               1216
                  {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
          1217
          1218
                  {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
                  {\normalfont\large\headfont}}
          1219
          1220 \fi
```

\subsubsection

1221 \if@twocolumn

1222 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%

1223 {\z@}{\z@}%

1224 {\normalfont\normalsize\headfont}}

1225 \else

42

```
\newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%
           1226
           1227
                 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%
           1228
                 \{\z0\}\%
           1229
                 {\normalfont\normalsize\headfont}}
           1230 \fi
   \paragraph 見出しの後ろで改行されません。
           1231 \if@twocolumn
               1232
                 {\z@}{-1\zw}% 改行せず 1\zw のアキ
                       {\normalfont\normalsize\headfont}}
           1234 %<jspf>
           1235 %<!jspf>
                       {\normalfont\normalsize\headfont ■}}
           1236 \else
               1237
           1238
                 {-1\zw}% 改行せず 1\zw のアキ
           1239
           1240 %<jspf>
                       {\normalfont\normalsize\headfont}}
           1241 %<!jspf>
                       {\normalfont\normalsize\headfont ■}}
           1242 \fi
\subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
           1243 \end{subparagraph} {\tt 0startsection\{subparagraph\}\{5\}\{\z0\}\%}
                {\z@}{-1\zw}%
           1244
                {\normalfont\normalsize\headfont}}
           1245
            8.3 リスト環境
              第 k レベルのリストの初期化をするのが \@listk です (k = i, ii, iii, iv)。\@listk
            は \leftmargin を \leftmargink に設定します。
 \leftmargini 二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが, ここでは全角幅の 2 倍にし
            ました。
              [2002-05-11] 3\zw に変更しました。
              [2005-03-19] 二段組は 2\zw に戻しました。
           1246 \ \ if@slide
           1247 \setlength\leftmargini{1\zw}
           1248 \else
           1249 \if@twocolumn
           1250
                 \setlength\leftmargini{2\zw}
           1252
                 \setlength\leftmargini{3\zw}
           1253 \fi
           1254 \fi
\leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくすること
\leftmarginiii になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。
```

43

\leftmarginv

\leftmarginvi

```
1256
                 \setlength\leftmarginii {1\zw}
             1257
                 \setlength\leftmarginiii{1\zw}
                 \setlength\leftmarginiv {1\zw}
             1258
             1259
                 \setlength\leftmarginv {1\zw}
                 \setlength\leftmarginvi {1\zw}
             1260
             1261 \else
             1262 \setlength\leftmarginii {2\zw}
                 \setlength\leftmarginiii{2\zw}
             1264 \setlength\leftmarginiv {2\zw}
                 \setlength\leftmarginv {1\zw}
             1266
                 \setlength\leftmarginvi {1\zw}
             1267 \fi
      \labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分
    \labelwidth に変えました。
             1268 \setlength \labelsep {0.5\zw} % .5em
             1269 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
             1270 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}
     \partopsep リスト環境の前に空行がある場合, \partopsep と \topsep に \partopsep を加えた値だけ
              縦方向の空白ができます。0 に改変しました。
             1271 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}
\@beginparpenalty リストや段落環境の前後,リスト項目間に挿入されるペナルティです。
 \@endparpenalty 1272 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
  \@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を
       \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえば \small の
              中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せる
              ように、\@listIで\@listiのコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここで
              は簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてありま
              す。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ最初と
              最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。
                [2004-09-27] \topsep のグルー ^{+0.2}_{-0.1} \baselineskip を思い切って外しました。
             1275 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
             1276 \parsep \z@
             1277 \topsep 0.5\baselineskip
             1278 \itemsep \z@ \relax}
             1279 \let\@listI\@listi
                念のためパラメータを初期化します(実際には不要のようです)。
             1280 \@listi
       \@listiii 1281 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
       \@listiv
                                             44
       \@listv
```

\@listvi

```
\labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
           1283
                \topsep \z@
                \parsep \z@
                \itemsep\parsep}
           1285
           1286 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
                \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
           1288
                \topsep \z@
           1289
                \parsep \z@
                \itemsep\parsep}
           1290
           1291 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
           1292
                           \labelwidth\leftmarginiv
                           \advance\labelwidth-\labelsep}
           1293
           1294 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
                           \labelwidth\leftmarginv
           1295
                           \advance\labelwidth-\labelsep}
           1296
           1297 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
                           \labelwidth\leftmarginvi
           1298
           1299
                           \advance\labelwidth-\labelsep}
             ■enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumiii, enumiv を使
             います。enum n は第 n レベルの番号です。
   \theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは IATFX 本体(ltlists.dtx 参照)で定義済み
            ですが、ここでは表し方を変えています。\@arabic, \@alph, \@roman, \@Alph はそれぞ
  \theenumii
            れ算用数字、小文字アルファベット、小文字ローマ数字、大文字アルファベットで番号を出
 \theenumiii
            力する命令です。
  \theenumiv
           1300 \renewcommand{\theenumi}{\Carabic\cCenumi}
           1301 \renewcommand{\theenumii}{\Qalph\cQenumii}
           1302 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
           1303 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
 \labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付
             きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に
\labelenumii
\labelenumiii 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。
\verb|\labelenumiv|| 1304 \verb|\newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}|
           1305 \newcommand{\labelenumii}{\inhibitglue (\theenumii) \inhibitglue}
           1306 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
           1307 \mbox{\lower.}
   \p@enumii \p@enumn は \ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書
  \p@enumiii 式です。これも第2レベルは和文用かっこにしました。
   \p@enumiv 1308 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
           1309 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi\inhibitglue (\theenumii) }
           1310 \verb|\renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii}| the enumiii}
```

■itemize 環境

1282

```
\labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。 \labelitemii ^{1311} \newcommand\labelitemii{\textbullet} \labelitemiii ^{1312} \newcommand\labelitemiii{\normalfont\bfseries \textendash} \labelitemiv ^{1313} \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered} \labelitemiv ^{1314} \newcommand\labelitemiv{\textperiodcentered}
```

■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

```
1315 \newenvironment{description}{%
```

- 1316 \list{}{%
- 1317 \labelwidth=\leftmargin
- 1318 \labelsep=1\zw
- 1319 \advance \labelwidth by -\labelsep
- 1320 \let \makelabel=\descriptionlabel\}{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\zw}) を入れるのもいいと思います。

1321 $\mbox{\newcommand*\descriptionlabel[1]{\normalfont\headfont $#1\hfil}}$

■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは, 独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので, list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

- 1322 %<*book>
- 1323 \newenvironment{abstract}{%
- 1324 \begin{list}{}{%
- 1325 \listparindent=1\zw
- 1326 \itemindent=\listparindent
- 1327 \rightmargin=0pt
- 1328 \leftmargin=5\zw}\item[]}{\end{list}\vspace{\baselineskip}}
- 1329 %</book>
- 1330 %<*article|kiyou>
- 1331 $\newbox\@abstractbox$
- 1332 \if@titlepage
- 1333 \newenvironment{abstract}{%
- 1334 \titlepage
- 1335 \null\vfil
- 1336 \@beginparpenalty\@lowpenalty
- 1337 \begin{center}%
- 1338 \headfont \abstractname
- 1339 \@endparpenalty\@M
- 1340 \end{center}}%

```
1341
      {\par\vfil\null\endtitlepage}
1342 \else
1343
     \newenvironment{abstract}{%
       \if@twocolumn
1344
         \ifx\maketitle\relax
1345
           \section*{\abstractname}%
1346
         \else
1347
1348
            \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
           \begin{minipage}[b]{\textwidth}
1349
             \small\parindent1\zw
1350
             \begin{center}%
1351
               1352
             \end{center}%
1353
             \left\{ \right\} 
1354
               \listparindent\parindent
1355
1356
               \itemindent \listparindent
               \rightmargin \leftmargin}%
1357
              \item\relax
1358
         \fi
1359
        \else
1360
1361
         \small
         \begin{center}%
1362
           1363
         \end{center}%
1364
         \left\{ \right\} 
1365
1366
           \listparindent\parindent
           \itemindent \listparindent
1367
1368
            \rightmargin \leftmargin}%
1369
         \item\relax
        \fi}{\if@twocolumn
1370
         \ifx\maketitle\relax
1372
         \else
           \endlist\end{minipage}\egroup
1373
1374
         \fi
        \else
1375
         \endlist
1376
        \fi}
1377
1378 \fi
1379 %</article|kiyou>
1380 %<*jspf>
1381 \newbox\@abstractbox
1382 \newenvironment{abstract}{%
     \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
1383
     \begin{minipage}[b]{157mm}{\sffamily Abstract}\par
1384
1385
1386
       \if@english \parindent6mm \else \parindent1\zw \fi}%
     {\end{minipage}\egroup}
1388 %</jspf>
```

■キーワード

keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。

- 1389 %<*jspf>
- 1390 %\newbox\@keywordsbox
- 1391 %\newenvironment{keywords}{%
- 1392 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
- 1393 % \begin{minipage}[b]{157mm}{\sffamily Keywords:}\par
- 1394 % \small\parindent0\zw}%
- 1395 % {\end{minipage}\egroup}
- 1396 %</jspf>

■verse 環境

verse 詩のための verse 環境です。

- 1397 \newenvironment{verse}{\%
- 1398 \let \\=\@centercr
- 1399 \list{}{%
- 1400 \itemsep \z@
- 1401 \itemindent -2\zw % 元: -1.5em
- 1402 \listparindent\itemindent
- 1403 \rightmargin \z@
- 1404 \advance\leftmargin 2\zw}% 元: 1.5em
- 1405 \item\relax}{\endlist}

■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を $1.5 \mathrm{em}$ から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

- 1406 \newenvironment{quotation}{%
- 1407 \list{}{%
- $1408 \hspace{1.5cm} \verb|\listparindent| \verb|\parindent|$
- 1409 \itemindent\listparindent
- 1410 \rightmargin \z@}%
- 1411 \item\relax}{\endlist}

■quote 環境

quote quote 環境は、段落がインデントされないことを除き、quotation 環境と同じです。

- 1412 \newenvironment{quote}%
- 1413 {\list{}{\rightmargin\z0}\item\relax}{\endlist}
 - ■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

\newtheorem{definition}{定義}

\newtheorem{axiom}{公理}

\newtheorem{theorem}{定理}

```
[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、\itshape を削除しました。
```

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し、 \labelsep を 1\zw にし、括弧を全角にしました。

1417 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2 (#3) }]}

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

```
1418 \newenvironment{titlepage}{%
```

1419 %<book> \cleardoublepage

1420 \if@twocolumn

1421 \@restonecoltrue\onecolumn

1422 \else

1423 \@restonecolfalse\newpage

1424 \fi

1425 \thispagestyle{empty}%

1426 \setcounter{page}\@ne

1427 }%

1428 {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi

1429 \if@twoside\else

1430 \setcounter{page}\@ne

1431 \fi}

■付録

\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。

```
1432 %<*!book>
```

1433 \newcommand{\appendix}{\par

1434 \setcounter{section}{0}%

1435 \setcounter{subsection}{0}%

1436 \gdef\presectionname{\appendixname}%

1437 \gdef\postsectionname{}%

1438 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]

1439 \gdef\thesection{\presectionname\@Alph\c@section\postsectionname}%

1440 \gdef\thesubsection{\@Alph\c@section.\@arabic\c@subsection}}

1441 %</!book>

1442 %<*book>

1443 \newcommand{\appendix}{\par

1444 \setcounter{chapter}{0}%

1445 \setcounter{section}{0}%

1446 \gdef\@chapapp{\appendixname}%

1447 \gdef\@chappos{}%

 $1448 \qquad \verb|\gdef\thechapter{\QAlph\c@chapter}| \\$

1449 **%</book>**

8.4 パラメータの設定

■array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 1450 \setlength\arraycolsep{5\ltjs@mpt}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 1451 \setlength\tabcolsep{6\ltjs@mpt}

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

1452 \setlength\arrayrulewidth{.4\ltjs@mpt}

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 1453 \setlength\doublerulesep{2\ltjs@mpt}

■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

 $1454 \setlength \tabbingsep{\labelsep}$

■minipage 環境

Compfootins minipage 環境の脚注の **\skip\Compfootins** は通常のページの **\skip\footins** と同じ働きをします。

 $1455 \ship\omega$ = \skip\footins

■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

 $1458 \ensuremath{\mbox{\sc 1}}\$ the equation {\centure arabic \centure equation}

1459 **%<*book>**

1460 \@addtoreset{equation}{chapter}

1461 \renewcommand\theequation

 $1462 \quad \{ \texttt{\c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \c@equation} \}$

1463 %</book>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

1464 % \setlength\jot{3pt}

\@eqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\inhibitglue (\theequation) \inhibitglue のように和文かっこを使うことも可能 です。

1465 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。

1466 % \def\tagform@#1{\maketag@@@{ (\ignorespaces#1\unskip\@@italiccorr) }}

8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置 (float placement specifier) です。

\ftype@TYPE フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...) でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

\@makecaption(*num*)(*text*) キャプションを出力するマクロです。(*num*) は **\fnum**@... の生成する番号、〈text〉はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

■figure 環境

\c@figure 図番号のカウンタです。

\thefigure 図番号を出力するコマンドです。

1467 %<*!book>

1468 \newcounter{figure}

1469 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}

1470 %</!book>

1471 %<*book>

1472 \newcounter{figure}[chapter]

1473 \renewcommand \thefigure

1475 %</book>

\fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外し \ftype@figure ました。

\ext@figure 1476 \def\fps@figure{tbp}

\fnum@figure 1477 \def\ftype@figure{1} 1478 \def\ext@figure{lof}

1479 \def\fnum@figure{\figurename\nobreak\thefigure}

figure *形式は段抜きのフロートです。

figure * 1480 \newenvironment{figure}%

{\@float{figure}}% 1481

{\end@float} 1482

```
1483 \newenvironment{figure*}%
            1484
                              {\@dblfloat{figure}}%
                              {\end@dblfloat}
            1485
             ■table 環境
    \c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が
  \t \thetable \thechapter{} · になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。
            1486 %<*!book>
            1487 \newcounter{table}
            1488 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
            1489 %</!book>
            1490 %<*book>
            1491 \newcounter{table} [chapter]
            1492 \ \text{renewcommand } \text{thetable}
                    {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
            1494 %</book>
  \fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外しま
\ftype@table した。
  \ext@table 1495 \def\fps@table{tbp}
\label{eq:local_stable} $$ 1496 \left(\frac{1496}{ftype@table{2}}\right) $$
            1497 \def\ext@table{lot}
            1498 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1498$ \color=ak}$}}
      table * は段抜きのフロートです。
     table * 1499 \newenvironment{table}%
            1500
                              {\@float{table}}%
            1501
                              {\end@float}
            1502 \newenvironment{table*}%
                              {\@dblfloat{table}}%
                              {\end@dblfloat}
            1504
```

8.6 キャプション

\@makecaption \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。\belowcaptionskip が0になっ \belowcaptionskip ていましたので,キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしまうのを直しました。

```
1505 \newlength\abovecaptionskip 1506 \newlength\belowcaptionskip 1507 \setlength\abovecaptionskip{5\ltjs@mpt} \% \vec{\pi}: 10\p@ 1508 \setlength\belowcaptionskip{5\ltjs@mpt} \% \vec{\pi}: 0\p@
```

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2 cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

[2015-05-26] listings パッケージを使うときに title を指定すると次のエラーが出るのを修正。

! Missing number, treated as zero.

```
1509 %<*!jspf>
1510 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small}
       \advance\leftskip1cm
1511 %
1512 %
       \advance\rightskip1cm
1513 %
       \vskip\abovecaptionskip
1514 %
       \sbox\@tempboxa{#1{\hskip1\zw}#2}%
       \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
1515 %
1516 %
         #1{\hskip1\zw}#2\par
1517 %
       \else
1518 %
         \global \@minipagefalse
1519 %
         \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
1520 %
       \vskip\belowcaptionskip}}
1521 %
1522 \long\def\@makecaption#1#2{{\small
     \advance\leftskip .0628\linewidth
1523
     \advance\rightskip .0628\linewidth
1524
     \vskip\abovecaptionskip
     \sbox\@tempboxa{#1{\hskip1\zw}#2}%
1526
1527
     \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi
     #1{\hskip1\zw}#2\par
     \vskip\belowcaptionskip}}
1529
1530 %</!jspf>
1531 %<*jspf>
\vskip\abovecaptionskip
     1534
     \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
1535
       {\small\sffamily
1536
         \list{#1}{%
1537
           \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
1538
           \itemsep
                       \z0
1539
1540
           \itemindent \z@
1541
           \labelsep
                       \z0
1542
           \labelwidth 11mm
           \listparindent\z@
1543
1544
           \leftmargin 11mm}\item\relax #2\endlist}
     \else
1545
       \global \@minipagefalse
       \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
1547
1548
     \fi
```

1549 \vskip\belowcaptionskip}
1550 %</jspf>

9 フォントコマンド

ここでは IATEX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ \text...と \math... を使ってください。

\mc フォントファミリを変更します。

1553 \DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}

 $\verb|\sf|_{1554} \verb|\DeclareOldFontCommand{\sf}_{normalfont\sffamily}{\mathsf}|$

\tt1555 \DeclareOldFontCommand{\tt}{\normalfont\ttfamily}{\mathtt}

\bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries です。

1556 \DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mathbf}

\it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま \sl せん (警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape \sc です。

 $1557 \verb|\DeclareOldFontCommand{\oit}{\onormalfont\oitshape}{\omathit}|$

 $1558 \verb|\DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\command\sl}$

 $1559 \verb|\DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\close{Command}\sc}|$

\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。

10 相互参照

10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合,上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \l0... というコマンドを実行するので, あらかじめ \l0chapter, \l0section, \l0figure などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \0dottedtocline コマンドを使って定義します。これは

\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\@pnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

 \land Cotocrmarg \land \land \lor Cotocrmarg \land \lor Copnumwidth \lor します。

\@dotsep 点の間隔です (単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが,ここでは一つずつ減らしています。

1562 $\newcommand\Qpnumwidth{1.55em}$

 $1563 \mbox{ \newcommand\@tocrmarg{2.55em}}$

1564 \newcommand\@dotsep{4.5}

1565 %<!book>\setcounter{tocdepth}{2}

1566 % <book > \setcounter {tocdepth} {1}

■目次

\tableofcontents 目次を生成します。

\js@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)

1567 \newdimen\js@tocl@width

1568 \newcommand{\tableofcontents}{%

1569 %<*book>

 $1570 \verb| \settowidth\js@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}| % \cite{Constraints} with the constraints of the$

 $1571 \quad \texttt{\settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}\%}$

1573 \ifdim\js@tocl@width<2\zw \divide\js@tocl@width by 2 \advance\js@tocl@width 1\zw\fi

1574 \if@twocolumn

1575 \@restonecoltrue\onecolumn

1576 \else

1577 \@restonecolfalse

1578 \fi

```
\chapter*{\contentsname}%
          1579
          1580
                \@mkboth{\contentsname}{}%
          1581 %</book>
          1582 %<*!book>
                \settowidth\js@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%
          1583
                \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
          1584
                \ifdim\js@tocl@width<\@tempdima\relax\setlength\js@tocl@width{\@tempdima}\fi
          1585
                \ifdim\js@tocl@width<2\zw \divide\js@tocl@width by 2 \advance\js@tocl@width 1\zw\fi
                \section*{\contentsname}%
          1587
                \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
          1588
          1589 %</!book>
          1590 \@starttoc{toc}%
          1591 % <book> \if@restonecol\twocolumn\fi
          1592 }
   \10part 部の目次です。
          1593 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
          1595 %<!book>
                          \addpenalty\@secpenalty
          1596 %<book>
                         \addpenalty{-\@highpenalty}%
                  \addvspace{2.25em \@plus\ltjs@mpt}%
          1597
          1598
                  \begingroup
                    \parindent \z@
          1599
          1600 %
                    \@pnumwidth should be \@tocrmarg
          1601 %
                    \rightskip \@pnumwidth
          1602
                    \rightskip \@tocrmarg
                    \parfillskip -\rightskip
          1603
                    {\leavevmode
          1604
                      \large \headfont
          1605
          1606
                      \setlength\@lnumwidth{4\zw}%
          1607
                      #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
          1608
                    \nobreak
          1609 %<book>
                         \global\@nobreaktrue
          1610 %<book>
                         \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
          1611
                  \endgroup
          1612
                \fi}
\l@chapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683\zw に増やしました。
              [2013-12-30] \@lnumwidth を \js@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
          1613 %<*book>
          1614 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
                \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
                  \verb|\addpenalty{-\@highpenalty}|| %
          1616
                  \addvspace{1.0em \@plus\ltjs@mpt}
          1617
                  \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
          1618 %
                  \begingroup
          1619
          1620
                    \parindent\z@
                    \rightskip\@pnumwidth
          1621 %
          1622
                    \rightskip\@tocrmarg
```

```
1623
                         \parfillskip-\rightskip
               1624
                         \leavevmode\headfont
               1625
                         \ \if@english\setlength\@lnumwidth{5.5em}\else\setlength\@lnumwidth{4.683\zw}\fi
                         \setlength\@lnumwidth{\js@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2.683\zw
               1626
                         \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
               1627
                         #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
               1628
               1629
                         \penalty\@highpenalty
               1630
                       \endgroup
                     fi
               1631
               1632 %</book>
     \l0section 節の目次です。
               1633 %<*!book>
               1634 \newcommand*{\l@section}[2]{%
                     \ifnum \c@tocdepth >\z@
               1635
               1636
                       \addpenalty{\@secpenalty}%
               1637
                       \addvspace{1.0em \@plus\ltjs@mpt}%
               1638
                       \begingroup
               1639
                         \parindent\z@
                         \rightskip\@pnumwidth
               1640 %
               1641
                         \rightskip\@tocrmarg
                         \parfillskip-\rightskip
               1642
               1643
                         \leavevmode\headfont
                         %\setlength\@lnumwidth{4\zw}% 元 1.5em [2003-03-02]
               1644
                         \setlength\@lnumwidth{\js@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2\zw
               1645
                         \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
               1646
                         #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
               1647
               1648
                       \endgroup
               1649
                     \fi}
               1650 %</!book>
                   インデントと幅はそれぞれ 1.5em,2.3em でしたが,1\zw,3.683\zw に変えました。
               1651 % \cdot\ \ \newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1\zw}{3.683\zw}}
                   [2013-12-30] 上のインデントは \js@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
                 さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので、要修正かも
  \1@subsection
                 しれません。
\1@subsubsection
                   [2013-12-30] ここも \js@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
   \1@paragraph
\verb|\location| 1652 %<*!book>|
               1653 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                  {\dot{cline}{2}{1.5em}{2.3em}}
               1654 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
               1655 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                  1656 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
               1657 %
               1658 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                  {\dot{cline}{2}{1\zw}{3\zw}}
               1659 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\zw}{3\zw}}
               1660 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                  {\dot{dottedtocline}{4}{3\zw}{3\zw}}
               1661 % \newcommand*{\l0subparagraph} {\0dottedtocline{5}{4\zw}{3\zw}}
```

```
1663 \newcommand*{\l@subsection}{%
                                                      \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima -1\zw
                                                       \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3\zw}}
                            1665
                            1666 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                                       \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 0\zw
                            1667
                                                       \c 3}{\c mpdima}{4\z w}
                            1668
                            1669 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                                      \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 1\zw
                            1670
                                                       \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5\zw}}
                            1671
                            1672 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                            1673
                                                       \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 2\zw
                                                       \cline{5}{\cline{5}}{\cline{6}zw}}
                            1674
                            1675 %</!book>
                            1676 %<*book>
                            1677 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
                            1678 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
                            1679 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
                            1680 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                            1681 \newcommand*{\l@section}{%
                            1682
                                                       \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima -1\zw
                                                       \cline{1}{\cline{3.683\zw}}
                            1683
                            1684 \newcommand*{\l@subsection}{%
                                                       \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\zw
                            1685
                                                       \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3.5\zw}}
                            1686
                            1687 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                                       \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\zw
                            1688
                                                       \cline{3}{\cline{3}}{\cline{3}}{\cline{3}}
                            1689
                            1690 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                                       \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\zw
                            1691
                                                       \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5.5\zw}}
                             1693 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                                                       \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\zw
                            1694
                                                       \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6.5\zw}}
                            1696 %</book>
       \numberline 欧文版 IATEX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
                               すが,アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
       \@lnumwidth
                               に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
                                入れておきました。
                             1697 \newdimen\@lnumwidth
                            1698 \end{area} $$1698 \end{
\@dottedtocline IATFX 本体 (ltsect.dtx 参照) での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
                               変えています。
                            1699 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                       \vskip \z@ \@plus.2\ltjs@mpt
                                        {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
```

1662 %

```
1703
                     \interlinepenalty\@M
              1704
                     \leavevmode
              1705
                     \@lnumwidth #3\relax
                     \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
              1706
                     {#4}\nobreak
              1707
                     \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep
              1708
              1709
                         mu$}\hfill \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
                           \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
              1710
               ■図目次と表目次
\listoffigures 図目次を出力します。
              1711 \newcommand{\listoffigures}{%
              1712 %<*book>
              1713 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
              1714 \else\@restonecolfalse\fi
              1715 \chapter*{\listfigurename}%
              1716 \@mkboth{\listfigurename}{}%
              1717 %</book>
              1718 %<*!book>
              1719 \section*{\listfigurename}%
                   \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
              1721 %</!book>
              1722 \@starttoc{lof}%
              1723 % <book> \if@restonecol\twocolumn\fi
              1724 }
     \l@figure 図目次の項目を出力します。
              1725 \newcommand*{\l0figure}{\0dottedtocline{1}\{1\zw\}\{3.683\zw\}\}
 \listoftables 表目次を出力します。
              1726 \newcommand{\listoftables}{%
              1727 %<*book>
              1728 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
              1729 \else\@restonecolfalse\fi
                   \chapter*{\listtablename}%
              1731 \@mkboth{\listtablename}{}%
              1732 %</book>
              1733 %<*!book>
              1734 \section*{\listtablename}%
              1735 \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
              1736 %</!book>
              1737 \@starttoc{lot}%
              1738 % <book > \if@restonecol\twocolumn\fi
              1739 }
      \1@table 表目次は図目次と同じです。
              1740 \let\l@table\l@figure
```

\parindent #2\relax\@afterindenttrue

1702

10.2 参考文献

1741 \newdimen\bibindent

```
1742 \stlength\bibindent{2\zw}
thebibliography 参考文献リストを出力します。
               1743 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
                    \global\let\presectionname\relax
                     \global\let\postsectionname\relax
               1746 %<article|jspf> \section*{\refname}\@mkboth{\refname}\%
               1747 %<*kiyou>
               1748
                     \vspace{1.5\baselineskip}
                     \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}%
                     \vspace{0.5\baselineskip}
               1751 %</kiyou>
               1752 % <book> \chapter*{\bibname}\@mkboth{\bibname}{}%
               1753 % <book > \addcontentsline{toc}{chapter}{\bibname}%
                      \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
               1754
                           {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
               1755
                           \leftmargin\labelwidth
               1756
               1757
                           \advance\leftmargin\labelsep
                           \@openbib@code
               1758
               1759
                           \usecounter{enumiv}%
                           \let\p@enumiv\@empty
               1760
               1761
                           \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
               1762 %<kiyou>
                             \small
               1763
                     \sloppy
                     \clubpenalty4000
               1764
               1765
                     \@clubpenalty\clubpenalty
                     \widowpenalty4000%
               1766
               1767
                     \sfcode`\.\@m}
               1768
                     {\def\@noitemerr
               1769
                      {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
               1770
                     \endlist}
     \newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。
               1771 \verb|\newcommand{\newblock}{\newblock}. 11em \verb|\oplus.33em \verb|\omlinus.07em||
\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによっ
                て変更されます。
               1772 \let\@openbib@code\@empty
```

\bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。

分なスペースが入らないように \inhibitglue ではさみました。とりあえずコメントアウ

\@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 [] を全角 [] に変え、余

トしておきますので、必要に応じて生かしてください。 1773 % \def\@biblabel#1{\inhibitglue [#1] \inhibitglue}

```
\cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが, コンマとかっこを和文 \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので, 必 \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \inhibitglue で取っていますので, オリジナル同様, Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。
```

```
1774 % \def\@citex[#1]#2{%
1775 %
       \let\@citea\@empty
1776 %
       \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
         {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
1777 %
1778 %
          \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb}%
1779 %
          \ifOfilesw\immediate\write\Oauxout{\string\citation{\Ociteb}}\fi
1780 %
          \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
1781 %
            \G@refundefinedtrue
1782 %
            \@latex@warning
1783 %
              {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
            {\hbox{\csname b@\@citeb\endcsname}}}}{#1}}
1784 %
1785 % \def\@cite#1#2{\inhibitglue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \inhibitglue}
   引用番号を上ツキの 1)のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に
 \unskip を付けて先行のスペース(~も)を帳消しにしています。
1786 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip
       \@ifnextchar [{\@tempswatrue\@citex}{\@tempswafalse\@citex[]}}
```

- 1788 % \def\@cite#1#2{ $^{\hbox{\scriptsize}}$ #1\if@tempswa
- 1789 % , \inhibitglue\ #2\fi}) }}\$}

10.3 索引

the index $2 \parallel 3$ 段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

```
1790 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境
1791 \if @twocolumn
1792 \newenvironment@restonecolfalse
1793 \else
1794 \clearpage\@restonecoltrue
1795 \fi
```

- 1796 \columnseprule.4pt \columnsep 2\zw
 1797 \ifx\multicols\@undefined
- 1798 %<book> \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
 1799 %<book> \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
 1800 %<!book> \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%

1801 %<!book> \twocolumn[\section*{\indexname}]%

1802 \else

1804 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}

1805 \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
1806 \setlength{\linewidth}{\fullwidth}

```
1810 %<!book>
                             \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
                    \else
          1812 %<book>
                            \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
          1813 %<book>
                            \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
          1814 %<!book>
                             1815 %<!book>
                             \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
          1816
                   \fi
                  \fi
          1817
                        \@mkboth{\indexname}{}%
          1818 %<book>
          1819 %<!book>
                         \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
          1820
                  \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
                  \parindent\z@
          1821
                  \parskip\z@ \@plus .3\ltjs@mpt\relax
          1822
                  \let\item\@idxitem
          1823
          1824
                  \raggedright
                  \footnotesize\narrowbaselines
          1825
          1826
                  \ifx\multicols\@undefined
          1827
                    \if@restonecol\onecolumn\fi
          1828
          1829
                  \else
                    \end{multicols}
          1830
          1831
                  \fi
          1832
                  \clearpage
                }
          1833
 \@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。
  \ \subitem 1834 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\zw} % \pi 40pt
\subsubitem ^{1835} \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{2\zw}} % \overrightarrow{\pi} 20pt
          1836 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\zw}} \% \vec{\pi} 30pt
\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。
          1837 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\ltjs@mpt \@plus5\ltjs@mpt \@minus3\ltjs@mpt\relax}
  \seename 索引の \see, \seealso コマンドで出力されるものです。 デフォルトはそれぞれ see, see also
 \alsoname という英語ですが、ここではとりあえず両方とも「\rightarrow」に変えました。\Rightarrow (\$\Rightarrow\$)
            などでもいいでしょう。
          1838 \newcommand\seename{\if@english see\else \rightarrow\fi}
          1839 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else \rightarrow\fi}
            10.4 脚注
 \footnote 和文の句読点·閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため,
```

\def\presectionname{}\def\postsectionname{}%

1809 %<!book>

\footnotemark \inhibitglue を入れることにします。

1840 \let\footnotes@ve=\footnote

1841 \def\footnote{\inhibitglue\footnotes@ve}
1842 \let\footnotemarks@ve=\footnotemark

1843 \def\footnotemark{\inhibitglue\footnotemarks@ve}

\@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 * を付けています。「注 1」の形式にするには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenextと合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい pTEX では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐため、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました(Thanks: 北川さん)。 [2014-07-02 LTJ] **\ifydir** を使わない形に書換えました。

1844 \renewcommand\@makefnmark{\hbox{}\hbox{\%}

1845 \unless\ifnum\ltjgetparameter{direction}=3 \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%

 $1846 \qquad \verb{\else\hbox{\yoko}@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\fi{\hbox{}}$

\thefootnote 脚注番号に* 印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは* 印も脚注番号も付きません。

[2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しました。

1847 \def\thefootnote\\ifnum\c@footnote\\z@\leavevmode\lower.5ex\hbox{*}\@arabic\c@footnote\fi} 「注 1」の形式にするには次のようにしてください。

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

1849 \renewcommand{\footnoterule}{%

 $1850 \ \kern-3\ltjs@mpt$

1851 \hrule width .4\columnwidth height .4\ltjs@mpt

1852 \kern 2.6\ltjs@mpt}

\c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。

 $1853 \label{local_loca$

\@footnotetext 脚注で **\verb** が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, *T_EX and TUG NEWS*, Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

1854 \long\def\@footnotetext{%

1855 \insert\footins\bgroup

1856 \normalfont\footnotesize

1857 \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty

1858 \splittopskip\footnotesep

1859 \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \QMM

1860 \hsize\columnwidth \@parboxrestore

1861 \protected@edef\@currentlabel{%

1862 \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark

1863 }%

1864 \color@begingroup

1865 \@makefntext{%

1866 \rule\z@\footnotesep\ignorespaces}%

\@makefntext 実際に脚注を出力する命令です。**\@makefnmark** は脚注の番号を出力する命令です。ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

```
1873 \newcommand\@makefntext[1]{%
```

- 1874 \advance\leftskip 3\zw
- 1875 \parindent 1\zw
- 1876 \noindent
- 1877 \llap{\@makefnmark\hskip0.3\zw}#1}

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext [0] {...} とすれば番号を付けない 脚注になります。ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので,工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```
1878 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
```

- 1879 % \begingroup
- 1880 % \ifnum#1>\z@
- 1881 % \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax
- 1882 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
- 1883 % \else
- 1884 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%
- 1885 % \fi
- 1886 % \endgroup
- 1887 % \@footnotetext}

11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

[2012-04-24 LTJ] Lua T_EX -ja では JFM に段落開始時の括弧類の字下げ幅をコントロールする機能がありますが、 $\$ item 直後ではラベル用のボックスが段落先頭になるため、うまく働きませんでした。形を変えて復活させます。

\item 命令の直後です。

 $1888 \end{align*} 1888 \end{align*} 1889 \end{$

- 1890 \if@noparitem
- 1891 \@donoparitem
- 1892 \else
- 1893 \if@inlabel

```
\indent \par
1894
1895
         \ifhmode
1896
1897
           \unskip\unskip \par
1898
         \if@newlist
1899
           \if@nobreak
1900
1901
              \@nbitem
           \else
1902
1903
              \addpenalty\@beginparpenalty
              \addvspace\@topsep
1904
              \verb|\addvspace{-\parskip}|| %
1905
1906
           \fi
         \else
1907
1908
           \addpenalty\@itempenalty
1909
           \addvspace\itemsep
1910
         \fi
1911
         \global\@inlabeltrue
1912
       \fi
       \everypar{%
1913
1914
         \@minipagefalse
         \global\@newlistfalse
1915
         \if@inlabel
1916
           \global\@inlabelfalse
1917
           {\setbox\z@\lastbox
1918
1919
            \left\langle ifvoid\right\rangle z@
               \kern-\itemindent
1920
1921
            fi}%
1922
           \box\@labels
           \left| y \right| = 1
1923
1924
         \fi
1925
         \if@nobreak
           \@nobreakfalse
1926
1927
           \clubpenalty \@M
         \else
1928
           \clubpenalty \@clubpenalty
1929
           \everypar{}%
1930
         \fi\@inhibitglue}%
1931
1932
       \if@noitemarg
         \@noitemargfalse
1933
         \if@nmbrlist
1934
           \refstepcounter\@listctr
1935
         \fi
1936
1937
       \fi
1938
       \begin{tabular}{l} $$ \strut^0 = mpboxa{\mathbf{41}}\ %
1939
       \global\setbox\@labels\hbox{%
         \unhbox\@labels
1940
         \hskip \itemindent
1941
         \hskip -\labelwidth
1942
```

```
\hskip -\labelsep
1943
1944
        \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
1945
          \box\@tempboxa
        \else
1946
          \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
1947
        \fi
1948
        \hskip \labelsep}%
```

1949

\ignorespaces}

\Ognewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの $pIATEX 2_{\epsilon}$ は段落の頭に グルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず, 不統一でし た。そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし、 ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので、また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

```
1951 \def\@gnewline #1{%
     \ifvmode
1952
        \@nolnerr
1953
1954
      \else
        \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
1955
1956
        \inhibitglue \ignorespaces
1957
     \fi}
```

12 いろいろなロゴ

LATEX 関連のロゴを作り直します。

\小 文字を小さめに出したり上寄りに小さめに出したりする命令です。

```
\上小 1958 \def\小#1{\hbox{$\m@th$%
```

```
1959
     \csname S@\f@size\endcsname
```

\fontsize\sf@size\z@ 1960

1961 \math@fontsfalse\selectfont

1962 #1}}

1963 \def\上小#1{{\sbox\z@ T\vbox to\ht0{\小{#1}\vss}}}

\Tex これらは ltlogos.dtx で定義されていますが、Times や Helvetica でも見栄えがするよう \LaTeX に若干変更しました。

[2003-06-12] Palatino も加えました (要調整)。

```
1964 \end{f}\end{cmrTeX} \label{lem:eq:cmrTeX}
1965
      \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
1966
         T\kern-.25em\lower.5ex\hbox{E}\kern-.125emX\@
1967
         T\ensuremath{\mbox{E}}\ensuremath{\mbox{E}}\ensuremath{\mbox{E}}\
1968
1969
      \fi}
1970 \def\cmrLaTeX{%
      \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
         L\kern-.32em\上小{A}\kern-.22em\cmrTeX
1972
1973 \else
```

```
1974
                    L\kern-.36em\上小{A}\kern-.15em\cmrTeX
1975
1976 \ensuremath{\verb| def\sfTeX{T\kern-.1em\lower.4ex\hbox{E}\kern-.07emX\ensuremath{\verb| 0}}}
1977 \def\sfLaTeX{L\kern-.25em\上小{A}\kern-.08em\sfTeX}
1978 \def\ptmTeX{%
              \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
1979
                    T\kern-.12em\lower.37ex\hbox{E}\kern-.02emX\@
1980
1981
                    T\kern-.07em\lower.37ex\hbox{E}\kern-.05emX\@
1982
              \fi}
1983
1984 \def\ptmLaTeX{%
              \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
1985
                    L\kern-.2em\上小{A}\kern-.1em\ptmTeX
1986
1987
1988
                    L\kern-.3em\上小{A}\kern-.1em\ptmTeX
1989
              \fi}
1990 \def\pncTeX{%
               \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
1992
                    T\ensuremath{$\text{T$}\ensuremath{$\text{E}$}\ensuremath{$\text{E}$}\ensuremath{$\text{C}$}}
              \else
1993
1994
                    T\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensure
               \fi}
1995
1996 \def\pncLaTeX{%
              \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
1997
                    L\kern-.3em\上小{A}\kern-.1em\pncTeX
1998
1999
                    L\kern-.3em\上小{A}\kern-.1em\pncTeX
2000
2001
               \fi}
2002 \def\pplTeX{%
              \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2003
                    T\kern-.17em\lower.32ex\hbox{E}\kern-.15emX\@
2004
2005
              \else
                    T\ker_{12em}lower.34ex\hbox{E}\kern-.1emX\0
2006
2007
2008 \texttt{\def\pplLaTeX} \{\%
              \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2009
                    L\kern-.27em\上小{A}\kern-.12em\pplTeX
2010
2011
               \else
2012
                    L\kern-.3em\上小{A}\kern-.15em\pplTeX
              \fi}
2013
2014 \def\ugmTeX{%
              \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                    T\kern-.1em\lower.32ex\hbox{E}\kern-.06emX\@
2016
2017
2018
                    T\ker_{12em}\ T\kern-.1emX\@
              \fi}
2019
2020 \def\ugmLaTeX{%
              \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2021
2022
                    L\kern-.2em\上小{A}\kern-.13em\ugmTeX
```

```
2023
                               \else
                                         L\kern-.3em\上小{A}\kern-.13em\ugmTeX
2024
2025
2026 \DeclareRobustCommand{\TeX}{\%}
                                \def\@tempa{cmr}%
2027
                                \ifx\f@family\@tempa\cmrTeX
2028
                               \else
2029
2030
                                          \def\@tempa{ptm}\%
                                          \ifx\f@family\@tempa\ptmTeX
2031
2032
                                                     \def\@tempa{txr}%
2033
                                                     \footnote{Minimal Market Mar
2034
2035
                                                     \else
                                                                \def\@tempa{pnc}%
2036
2037
                                                                \ifx\f@family\@tempa\pncTeX
2038
                                                                \else
                                                                           \def\@tempa{ppl}\%
2039
                                                                           \ifx\f@family\@tempa\pplTeX
2040
                                                                          \else
2041
2042
                                                                                     \def\@tempa{ugm}%
2043
                                                                                     \ifx\f@family\@tempa\ugmTeX
                                                                                     \else\sfTeX
2044
                                                                                     \fi
2045
                                                                          \fi
2046
                                                                \fi
2047
2048
                                                     \fi
                                          \fi
2049
2050
                                fi
2051
2052 \DeclareRobustCommand{\LaTeX}{%
                                \def\@tempa{cmr}%
2053
2054
                                \ifx\f@family\@tempa\cmrLaTeX
                               \else
2055
2056
                                          \def\@tempa{ptm}%
                                          \ifx\f@family\@tempa\ptmLaTeX
2057
2058
                                                     \def\@tempa{txr}%
2059
                                                     \ifx\f@family\@tempa\ptmLaTeX
2060
2061
                                                     \else
                                                                \def\@tempa{pnc}%
2062
                                                                \ifx\f@family\@tempa\pncLaTeX
2063
                                                                \else
2064
2065
                                                                           \def\@tempa{ppl}%
                                                                           \ifx\f@family\@tempa\pplLaTeX
2066
2067
                                                                          \else
2068
                                                                                     \label{lem:lempa} $$ \end{sugm} % $$ \end{sugm} % $$ \end{sugm} $$ \en
                                                                                     \ifx\f@family\@tempa\ugmLaTeX
2069
                                                                                     \else\sfLaTeX
2070
                                                                                     \fi
2071
```

```
2072
                                                                   \fi
                               2073
                                                              \fi
                               2074
                                                         \fi
                               2075
                                                   \fi
                                              \fi}
                               2076
            \LaTeXe \LaTeXe コマンドの \mbox{\m@th ... で始まる新しい定義では直後の和文との間に
                                   xkan jiskip が入りません。また、mathptmx パッケージなどと併用すると、最後の \varepsilon が下
                                   がりすぎてしまいます。そのため、ちょっと手を加えました。
                               2077 \DeclareRobustCommand{\LaTeXe}{$\mbox{%}
                                            \if b\expandafter\@car\f@series\@nil\boldmath\fi
                                            \LaTeX\kern.15em2\raisebox{-.37ex}{$\textstyle\varepsilon$}}$}
                 \pTeX pTeX, pIATeX 2<sub>e</sub> のロゴを出す命令です。
            \pLaTeX 2080 \def\pTeX{p\kern-.05em\TeX}
          \pLaTeXe 2081 \def\pLaTeX{p\LaTeX}
                               2082 \ensuremath{ \ensuremath{ \mbox{ 2082 \ensuremath{ \mbox{ \} \mbox{ \mbox{ \} \mbox{ \nod} \ext{ \mbox{ \mbox{ \} \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \nod} \ext{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \nod} \ext{ \mbox{ \nod} \ext{ \mbox{ \mbox{ \nod} \ext{ \mox{ \nod} \ext{ \mox{ \nod} \ext{ \mox{ \nod} \ext{ \mox{ \nod} \ext{ \nod} \ext{ \ext{ \ext{ \nod} \ext{ \ext{ \nod} \ext{ \ext{ \ext{ \nod} \ext{ \ext{ \nod} \ext{ \ext{ \ext{ \ext{ \nod} \ext{ \ext{ \ext{ \ext{ \ext{ \ext{ \ext{ \ex
            \AmSTeX amstex.sty で定義されています。
                               2083 \end{AmSTeX{\protect\AmS-\protect\TeX{}}}
            \BibTeX これらは doc.dtx から取ったものです。ただし、\BibTeX だけはちょっと修正しました。
            \SliTeX 2084 % \@ifundefined{BibTeX}
                               2085 %
                                                      {\def\BibTeX{{\rmfamily B\kern-.05em%
                               2086 %
                                                         \textsc{i\kern-.025em b}\kern-.08em%
                               2087 %
                                                         T\kern-.1667em\lower.7ex\hbox{E}\kern-.125emX}}}{}
                               \ifx\f@family\cmr\kern-.08em\else\kern-.15em\fi\TeX}
                               2090 \DeclareRobustCommand{\SliTeX}{%
                                            S\kern-.06emL\kern-.18em\上小{I}\kern -.03em\TeX}
                                   13
                                                   初期設定
                                   ■いろいろな語
\prepartname
```

```
\postpartname 2092 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
\prechaptername 2093 \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
                2094 % hook > \newcommand { \prechaptername } { \if@english Chapter ~ \else 第\fi}
\postchaptername _{2095} %<book>\newcommand{\postchaptername}{\if@english\else 章\fi}
\presectionname 2096 \newcommand{\presectionname}{}% 第
\postsectionname ^{2097} \newcommand{\postsectionname}{}% 節
   \contentsname
\listfigurename 2098 \newcommand{\contentsname}{\if@english Contents\else 目次\fi}
 \listtablename ^{2099} \newcommand{\listfigurename}{\\difGenglish List of Figures\else 図目次\fi}
                2100 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
```

```
| \refname \ \bibname 2101 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi} \ \indexname \ 2102 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi} \ 2103 \newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi} \ \figurename \ \tablename 2104 %<!jspf>\newcommand{\figurename}{\if@english Fig.~\else 図\fi} \ 2105 %<jspf>\newcommand{\figurename}{\if@english Table~\else 表\fi} \ 2106 %<!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi} \ 2107 %<jspf>\newcommand{\tablename}{\tablename}{\tablename}{\tablename}{\tablename} \ \abstractname 2108 % \newcommand{\appendixname} \ \abstractname \ \abstractname \ 2108 % \newcommand{\appendixname} \ \appendixname \ \a
```

■今日の日付 IATEX で処理した日付を出力します。ltjarticle などと違って、標準を西暦にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \arthogonapert を書いてください。

\today

```
2111 \newif\if 西暦 \西暦 true
2112 \def\西暦{\西暦 true}
2113 \def\和暦{\西暦 false}
2114 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
2115 \def \today{%}
2116
     \if@english
2117
        \ifcase\month\or
          January\or February\or March\or April\or May\or June\or
2118
          July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
2119
          \space\number\day, \number\year
2120
2121
     \else
2122
        \if 西暦
          \number\year 年
2123
          \number\month 月
2124
2125
          \number\day ∃
2126
        \else
          平成\number\heisei 年
          \number\month 月
2128
2129
          \number\day ∃
2130
        \fi
2131
     \fi}
```

■ハイフネーション例外 T_{EX} のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

2132 \hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-script}

■ページ設定 ページ設定の初期化です。

```
2135 \% \leq psf \geq pagestyle{headings}
2136 \pagenumbering{arabic}
2137 \if@twocolumn
2138 \twocolumn
2139 \sloppy
2140 \flushbottom
2141 \else
2142 \quad \verb|\onecolumn|
2143 \raggedbottom
2144 \fi
2145 \setminus if@slide
2146 \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}
2147 \renewcommand\familydefault{\sfdefault}
2148 \raggedright
2149 \ltj@setpar@global
2150 \ltjsetxkanjiskip{0.1em}\relax
2151 \fi
  以上です。
```